
□ 《外伝》 □ 不死の “ 概念 ” 剣製と真祖の少女

気常 狸由

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

□ 《外伝》 □ 不死の“概念” 剣製と真祖の少女

【Nコード】

N 8 6 8 4 M

【作者名】

気常 狸由

【あらすじ】

不死の概念剣製少女・佳奈がネギまの世界じゃなく、異世界に行っちゃいます。

今回はゼロの使い魔。

本編とはパラレルワールド扱いにするので、かなり乖離するかも。

そしてこの子、『帰る』って発想はありません。

第一話（前書き）

冒険しちゃった♪

じゃなくて、リハビリです。

新刊かその次で魔法世界編終わるだろうから、情報に齟齬が発生させたくないんじゃないー！

第一話

目を覚ますと、誰かに覗き込まれている事に気付いた。

緩くパーマがかかったとても綺麗なピンクの髪。

日本人には出せない類の白い肌。

そして、可愛らしさと絵画のような美しさが同居したような顔。

そんな人間離れた美少女が、その美貌を胡散臭そうにあたしを見ながらこう言い放った。

「あんだ、誰？」

『矢剣の姫』『魔族の槍姫』などの異名を持つ魔法世界の英雄。

かの有名な騎士王の代理役。
ある英雄の息子のコーチ役。
ある中学の三年A組の生徒。

これらがあたし、佳奈・クリスティーナ・ホーエンツォレルンの肩書だった。

あたしとしては、1番以外はあんま名乗りたくないが。

そんなあたしは、何故か寝てたはずの部屋ではなく若干マナの濃い草原で、高飛車そうだけどこかなり良い美少女に、素性を聞かれていた。

とりあえず、正直に名乗る。

「あたしは佳奈・クリスティーナ・ホーエンツォレルンです。
貴女のお名前は？」

敬語の理由は、此処が何処か判らないからとなんかアリカ陛下の高飛車そうというか偉そうな態度に似てたから。

しかし、何やらとても嫌そうに声を挙げた。

「私はルイズ・ド・ラ・ヴァリエールよ」

そして小声で文句。

「・・・うう、なんでよりによって平民なんかを・・・。

ミスター・コルベール！！

サモンサーヴァントやり直させてください！！！」

そして、彼女の近くに居た、端的に言うところ結構ハゲたおっさんにそう宣った。

それを聞いて、少し驚いた。

サーヴァントとして喚ばれたにしては、世界からの知識提供は無いし、肉体もエーテルじゃなくてあたしそのものだし、なにより『魔術』を使う世界じゃない事が判っていたからだ。

あたしの常識が通じない世界。

・・・にしてもコイツ、あたしは強かないけど弱くもないのに一目で『チェンジ！』はないっしょ。

失礼にも程があらうに。

軽く呆れていると、おっさんが軽く窘める。

「駄目ですよ、ミス・ヴァリエール。

この使い魔召喚の儀は伝統にして神聖なものです。相手が人間だからと言っても彼女と契約しなくてはなりません」

人間じゃないです。

「だから、再召喚をさせてください！」

「使い魔を呼び出した以上、彼女が死なない限り再召喚は出来ないです。

さっさとコントラクト・サーヴァントをしなさい」

「なん・・・だと・・・」

良い感じに絶望しているピンク髪の娘。

それに一種の小気味よさを感じつつも、ずっと『ヘイミンが、ヘイミンの』と侮蔑するような彼女と、おっさん以外の周りのあたしへの扱いに自尊心が軽く傷付く。

・・・だからそもそも人間じゃねーよ。

そして、それに対する良い気晴らしを思いついた。

それは、あたしが力で召喚の際の一方的な契約を打ち切る方法。つまり、強制的な解呪。

あたしの力を見せつけ、なおかつ立場を契約者に縛られない。成功率も高い。

魔力、気力、獄力。

今まで、あたしのこの三つの力を耐え切れる簡易な魔法はなかったから多分出来るはず。

あたしはそう判断し、未だに騒いでる少女と、その少女を馬鹿にする周りの人間を無視して、即座に魔術回路と常に抑えている気と獄力を全力解放した。

力に耐え切れずに少しでも術式に揺らぎが出れば、崩すきっかけになると思ったから。

案の定出たので、余計な消費はしなくて良さそうだ。

この力を解放した段階で、即座に異変に感づいたのは三人。

赤髪の女性と青髪の少女とさっきの軽く薄いおっさんだった。

三人はほぼ同時にあたしに杖を向ける。

なのに、何故三人が焦りの表情で杖を向けてるのか判ってない周囲は不思議そうにするだけ。
そんな彼らにおっさんが怒鳴りつけた。

「今すぐ障壁を張りなさい!!」

わたわたと動き始める周囲を余所に、おっさんはあたしに名乗り、質問してきた。

「私は、このトリステイン魔法学院で教師をしているジャン・コルベールと申します。

失礼ながらも、貴女の名とそのような行動の理由をお聞かせ頂きたいのですが」

紳士的ながらも戦闘も辞さないという態度を崩さない。

教師と言われると、偏った正義バカか、自分の弟分か、自分の弟子か、妖怪みたいな爺しか知らないの、教え子を守ろうとする所になんか感動した。

自然と、敬意を払うべきだと思える。

「失礼、あたしの名は佳奈・クリスティーナ・ホーエンツォレルン

です。

質問に答える前に謝罪を。

ミスター・コルベール、誤解を招き申し訳ありません。

こちらから生徒に危害を加える気はありませんのでご安心を。

・・・あたしはその召喚者の態度が気に食わなかったので、戒めになっている召喚時の術式を壊そうとしているだけです。

そちらだって、あたしに対する縛りが解ければあたし以外を召喚することも出来るでしょう？」

念のために詳細な術式の解析を行いながらも、丁寧を心掛けてコルベール氏に答える。

・・・そういえばさつき、ハゲてるのかと思ってごめんね？
人生経験の豊富さが御髪に顕れているだけだもんね？

あたしのそんな思考も反省もフォローも知らないコルベール氏は、杖を降ろしながらあたしを否定した。

「・・・お待ち下さい。

そこまで強大な魔力を持っているのはメイジであり、家名があるという事は貴族であるという事。

たとえ貴女の身が最下級の貴族であろうと、貴女を使い魔などにはさせられませんし、怪我など以っての外なのでご勘弁を。

我が国の外交問題に発展しかねませんから」

このままだと、なんか厄介になりそうだとあたしの直感（B）が告げってくる。

とりあえずは、壮大な勘違いをしているみたいだから正しつつ、気になった所を聞こう。

「でも、必要だから喚んだんじゃないんですか？

それに、あたしは貴族でもなければ魔法使いじゃないし。

ただ人より多少魔力が多いだけですよ。

現に魔法は使えません、しっ！」

問いつつ、解析し終わった術式の弱い所を重点的に魔力と気をぶつけた。

獄力は二つの力の逆流を防ぐ安全装置のように扱う。

正直、この作業を始めるタイミングは、コルベール氏の返答聞いただけでも悪くはなかった。

だけど、下手に拘れると身動き取れなくなるし、話が平行線を辿るのは嫌だった。

あたしの中では、長い期間グダグダになるよりは、バカやって怒られた方がマシなのだ、まる。

後、あたしは貴族じゃないから反発される訳がないと判っていたの

もある。

つか、白人種の国で、貴族制が残っているような国などあたしの世界にはなかったから、反発してくれる場所など有り得ない。

・・・もし間違つてあたしが此処で死に、旧世界や魔法世界であたしの死亡が知れ渡ったとしても、メガロの糞爺共は確実に涙を流して喜ぶだろうし。

言い忘れていたが、この作業は紙コップに消火用のホースで放水するようなものだ。

しかも、一回折り曲げられてクタクタになった紙コップ。

つまり、いくら水を貯められるとはいえ、勢いが強けりゃ耐え切れないに決まっているような代物。

なので、ヘタレた紙コップである術式は、ガラスが碎けるような音と共に消えていったのでした。

後片付けとして回路を閉じ、気と獄力を抑えつける。
そして自分の成した仕事に満足していると、コルベール氏が興奮したように近づいてきた。

「なんと、本当に解呪が出来るとは……。」

魔力の暴走を引き起こすだけで、詠唱者以外は干渉出来ないコモンマジックの永続的な術式の崩壊をさせるとは。

いや、待て……。それは有り得ないはずだ……。

……。ということは、私達には到達出来ない……？

まさか、貴女は伝説の系統の『虚無』なのか……！？」

その言葉に、ざわめく周囲。

普通、こういう状況に陥ったら、あたし程度に力が有る奴は喜んで『そうです、わたすが虚無のオジサンです』とか言っただろう。

しかしあたしからすると、伝説の称号は紅き翼で十分貰ったし、あんなモノは足枷にしかない。

なので、即座に否定した。

「違います。」

あたしはこちらの主流と根本から違う技術を使うだけなので、虚無などという魔法系統とは確実に違います。

ただ脆い部分に魔力をぶつけて壊しただけです」

厄介事に巻き込まれたくないというのが伝わったのか、コルベール氏は苦笑した。

「そんなに否定しなくとも・・・。

もしも虚無だとしたら、それはかなり喜ばしい事ですよ。

・・・しかしながら、これで本当にミス・ヴァリエールの使い魔が居ません・・・。

ミス・ヴァリエール。

今日もう一回だけサモン・サーヴァントに挑戦して、失敗ならば明日丸一日試してみないかね？」

慈愛に満ちた目でピンクの美少女を見るコルベール先生。

彼女は、パアッと表情を笑顔に変えた。

嬉々として杖を取り出す彼女に、あたしが立ってる方向の真逆を向いて召喚に挑戦するように言ってもいる。

この人、あたしには人格者すぎて直視出来ない・・・。

そんな訳で、ルイズに与えられた今日のラストチャンス。
流れるような召喚の中、爆発と共に人間が現れた。

手にはウルトラモバイル。
背中にはリュックサック。
服装はジャージっぽいパーカーにジーンズ。
髪は黒くて弄ってなさそう。

召喚されたのは、ごくごく一般・・・よりは、そこそこインドアっぽい日本人の少年だった。

その瞬間、あたしは確実にとばっちりというか、英霊やあたし自身として喚ばれたのではなく、不特定多数のどれかといった感じのノリで喚ばれた事を認めさせられる事になった。

だって、少年の肉体がもろにインドアなんだもん・・・。

若干、あたしのあまりの召喚対象の広さに絶望。
されど一応狙った通りに縛りは解けたのでトントンとする。

そう割り切らないと、一応ちっちゃいとはいえ英霊まで登りつめたプライドが赦さない。

少年とルイズを見ると、ルイズも何故か絶望していた。

それでも流石に二回目は拒否出来ないと思ったらしく、何かを唱えながら少年に近づいていく。

そして、キス。

此処でも契約はキスカー、と思っていると、少年が左手を抑えながら暴れ始めた。

なんか可哀相。

それも数秒で終わり、少年が手を外すと左手には見たことがないマークが刻まれていた。

コルベール氏はその左手のマークをスケッチすると、周囲に学校に帰るように指示をした。

その言葉を聞いた途端、赤髪の女性と青髪の少女、ピンクのルイズと黒髪の少年、あたしとコルベール氏以外はさっさと飛んで帰っていく。

赤と青の少女二人は残りたがったけど、コルベール氏によって無理矢理先に帰るように言われて渋々帰っていった。

そういえば、帰り際にルイズをバカにしていく男子が多かった。

どうやらルイズには魔法的センスが欠けているとバカにしたい様子だった。

現にルイズも悔しそうにしてたから、実際下手っぴなんだろう。

そんな事を思っていると、コルベール氏が近付いてきた。「貴女は何やら人間とは違う匂いのする魔力を持っているみたいですね。我々に貴女の正体を明かしては貰えないでしょうか？」

・・・少し驚いた。

どうやらあの解呪という名のごり押しで気づいたらしい。

「・・・あたし、そんなに判りやすかったですか？」

少し恥じながら、コルベール先生に言外に『何人氣付いたか』と聞く。

「いいえ、あの解説がなければ気付かなかったでしょう。

杖を向けた私達ですら力の強大さに恐れただけで、存在の違和感は『もしかしたら違うのかもしれない可能性がある』といった程度のものでしかありませんでしたな」

彼は可笑しそうに笑いながら、あたしの問いに答えてくれた。

少し安心。

そしてこういう対応をしてくれるコルベール先生に感謝の気持ちを込めて明かす。

「あたしは人間寄りの魔族です。

そして、紅き翼の一員として戦争の黒幕を見つけだして大戦を終結させた英雄とも、兵を狩る残虐な真の悪魔とも呼ばれています」

そして一礼。

頭を上げると、ぼかんとした顔を向けられていた。

「……どうかしましたか？」

不安になってそう彼に聞くと、呆けた顔のまま逆に尋ねられた。

「いつ、その大戦があつたのですか？」

「ざつと20年程前です」

「内容は？」

「二大大国である帝国と連合が古都オスティアを奪い合うように進みました。

黒幕で、二つの国の幹部にまでシンパが居た超巨大組織『完全なる世界』の指示によりますが。

最終的に、我々『紅き翼』が黒幕を、二国の中立を保っていた学術都市国家アリアドネーと手を組み倒したという過去最大の魔法世界での大戦です。

やはり、ご存知無いですか？」

此処は魔法体系の違う異世界だということは判っていた。けど、一応確認しなければならぬ。

その為の問いだった。

コルベール先生がほんの少し驚愕の色を顔に浮かべながら、肯定する。

「ええ、知りません。

その魔法世界とやらも何処かも判りませんな。

・・・貴女は何処から来たのですか？」

あたしはその疑問に、自分でもあくどいと思うような微笑を張り付けて答えた。

「異世界から来たんです。」

なかなか信じなかったけど、その会話に黒髪の少年が混ざってきて状況が変わった。

ノートパソコンと携帯をルイズとコルベール先生に突き付けたのだ。

その画面の精緻さに興奮する二人に、科学について説明をした。

結果、二人は片方は渋々、片方は興奮しながら納得してくれたのだ。

った。

そして、あたし達の説明の代わりにと、興奮した方のコルベール先生がこの世界の事を説明してくれた。

一通り終わると、黒髪の『平賀才人』という名の少年は、今度はあたしに疑問をぶつけてきた。

「なあ、俺の世界には魔法なんてなかったんだけどさ、俺とお前の世界って違うのか？」

なかなか面白い事を聞かれた。

確かに、あたしのと違うかもしれない。

でも、コレを聞けばなんとかなるはず。

「あんたの世界に、埼玉県にあるバカデカい学園都市は在る？
麻帆良っていうんだけど」

質問に質問を返された事で才人はムツとしたみたいだけど、答えてくれる。

「・・・在ったな。」

内部の大学の技術力が世界トップクラスって聞いた事がある」

「じゃあもうひとつ。」

あんた、軽くオタクっぽいけどネットアイドルに興味ある？」

更にムツとしつつ、あたしの真剣さが伝わったのか吐いた。

「・・・ああ、嫌いじゃない。でもよ、正直な話有名な『ちうのホームページ』くらいしか見てないからな？」

その答えを聞いて、あたしは腹を括った。

「・・・十分。」

なら、学園祭初日のイベントの画像とその時新設された『けーなの部屋』を見た事は？」

「あ、あれか！！」

見た見た、あの子可愛いよな！！

ちうも良いんだけど、俺的にはけーな。

特に初期のショットでボーイッシュだった時のけーの方が好きかなあ」

したり顔で頷く才人。

なら、恥ずかしいけど夢を壊してやろう。
あたしへのダメージ覚悟で。

「それ、あたし。」

なるべく気負わないようにサックリあっさり言ってみた。

「へっ？」

才人は間抜け顔を浮かべながら聞き返す。

「だから、けーなはあたし。
学祭の非公式イベントでコスプレして、同級生のちうに罰ゲームと
して上げられたのです」

少し詳しく説明すると、才人は理解したみたいだ。

「マジかよ……。
あのコスプレの時の巨乳は詐欺かよ……。
絶望した……」

「・・・おい、ショートでボーイッシュに引かれたんじゃないのか・・・？」

「じゃなくて、あたしが言いたい事が判る？」

大変失礼なこいつに怒りを隠しながらも尋ねると、気を取り直したように答える。

「そうだな。」

俺達は同じ世界から来ていて、俺達の世界では魔法は一般人には隠蔽されている、って事か？」

「そーゆーこと。」

ついでに言っと、あの学園都市の幹部や一部の先生、生徒は魔法関係者だから、うじゃうじゃ魔法使いが居るよ」

ニヤつきながら教えてやると、才人は興奮と驚愕と恐怖が入り混じったような表情で一言だけぽつりぽつりと呟いた。

「まじかよー・・・」

それをからかっていると、コルベール先生に中断された。

「なるほど、良く判りませんでした但二人とも同じ世界で異世界の

住人であることは確定されたようですな。
ならば、学院に戻りますぞ」

あたし達は了解の意を伝えると、先程の会話で魔法が使えないと発覚したルイズをあたしが抱え、登場の時の予想通りやっぱりオタクだった才人をコルベール先生が抱えた。

先導をフライという呪文を使ったコルベール先生に任せ、あたしはルイズをお姫様抱っこにする。
そして、コルベール先生を目で追いながらかなりのスピードで森を疾走した。

学院に着くと、ルイズも才人もグロッキーになっていた。
理由をコルベール先生に聞くと、あたしが速いペースを崩さないから軽く意地を張ってしまったと苦笑いとともに言ってくれた。

コルベール先生の話では午後は全て使い魔との交流の時間らしいの

で一時的に休憩とする。

しかし、あたしは大して消費はしていないので暇。

暇潰しに、ランスとアークを影から出して遊ぶ事にした。

そこら辺に在った木の棒を持ち、アークとランスを呼ぶと、あたしの後ろから二匹が現れた。

予想外に速く出て来たので一応二匹を軽く褒め、投げるから取ってこいと言おうとしたらコルベール先生が尋ねてきた。

「すいませんが、ミス・カナ。」

その動物はいったい・・・？」

軽く出鼻をくじかれたのを不満に思ったけど、コルベール先生の輝いた笑顔を見た瞬間、それがすっかり霧散してしまった。

あんなめちゃくちゃ楽しそうな子供みたいな顔をされたら、誰でも文句が言えなくなる。

「んー、形だけ動物を模した、『あたしでありあたしでない』独立した分体ですよ。」

言うなれば、あたしの子供みたいなものなんです」

そこで、少しばかり良い事を思い付いた。

「・・・そうだ。

この子達の戦闘力はあたしが力を制限した状態でのベストとあまり変わらないんで、この子達の模擬戦でも見ますか？」

そう提案すると、先生はかなり興味を引かれたらしく一時的に興奮しそうになった。

でも、それを瞬時に抑え戦闘者だけが持ちこた目であたしに尋ねる。

「・・・オールド・オスマン。

ここの責任者である学院長にも見せて良いかね？」

「勿論。

あたしの詳細をそちらに押さえて貰う事はお互いに必要でしょう。なので、コルベール先生が戻ってきたら開始しますね」

あたしがそういうと、コルベール先生はすまないとだけ一言言い置き校舎に駆け足で入っていった。

数分でコルベール先生は戻ってきた。

オールド・オスマンという学院長は、イベント以外ではあまり学院長室から出て来ないらしい。

なので、出歩くと目立つのでマジックアイテムで観戦すると話をされた。

故に場所は変えられないとも言われてしまったので、気休めだけど他人様を巻き込まないようにちゃっちゃと『人払い』と『認識阻害』のルーンを地面に刻んで魔力を通す。

『ここは魔法学院』とかルイズにしてもコルベール先生にしても言うてたから効果はかなり薄いだろうけど、やらないよりマシ。

ここの魔法使いの強さは判らないけど、もし紛れ込んできて怪我されてもあたしには責任取れない。

そんな時のこちらの言い分としての『ルーン刻んでた』はかなりの効力を発揮すると信じたい。

しかし、ここのルーンは使い魔に刻む事にしか使われないらしく、ルイズとコルベール先生にかなり驚かれた。

しかも、能力の向上にしか使われなかったせいでルーンが欠けてしまったらしく、『この二つのルーンはこの世界には存在してない』

とまで言われてしまった。

説明された時、ルーンの扱いの低さに同情したのは秘密だ。

一応簡易だけど準備が終わったので、二匹に話し掛ける。

「遠慮は要らないから、接近戦でお互いやり合ってちょうだいな。軽い模擬戦だから、速さを見せてくれるだけで十分だからね？」

その言葉にランスは一吠えで、アークは翼を広げる事で答えてくれる。

「じゃあ、この石が地面に落ちたら開始して」

あたしはそう言って、小石を軽く真上に投げた。

一回空中で止まり、速度を上げ始める小石。

それが地面に刺さると同時に、二匹は動き出した。

四肢を使い、鷹に肉薄する狼。

羽を使い、狼を掴みにかかる鷹。

お互いに瞬動や加速を使い分けながら一撃を加えようと画策しながらタイミングを伺う二つの獣。

牙を剥けば羽で防がれ、爪を立てれば前足で払われる。

お互い深いダメージを与えられない一進一退の攻防を目に止められない程のスピードで繰り返していく。

そして、不意を突かれてバランスを崩したアークの首を噛むようにして掴んだランスの勝利で終わった。

アークを獄力を使って治療し、ランスにご褒美としてあたしの血をあげてから後ろを向くと、そこには速すぎて理解出来ずに呆然としてる二人と理解出来た為に固まっている一人が居た。

その一人は言うまでもないコルベール先生。

目に驚愕と畏怖の色がはつきりと見て取れたからすぐに判った。

戦場出たことが無い一般人である他の二人には、あの速さは感知出来ないから困惑しか見て取れないのと同じ。

ぽつりと、コルベール先生が呟いた。

「・・・ミス・ホーエンツォレルン。

貴女自身はこれ以上のスピードを出せるのかね・・・？」

「いいえ、ミスタ・コルベール。

これ以上は私には多分出せないでしょう。

距離の話だと別ですが、速度となるとやはり限界がありますので」

あたしは、焦りからあたしに生徒のような対応を取るコルベール先生に合わせて、真剣かつ真摯に答える。

すると、コルベール先生は冷静さを取り戻した。

「・・・申し訳ない。

あのような普通の人間では見えない速さには、大軍だろうと武人だろうと脅威に足り得ないと感じてしまつてな。

・・・これから、貴女の立場や生活について話し合いたい。

このまま学院長室に着いて来て貰えないかね？」

最初の言葉にルイズ主従は今更のように驚き、内容が進むに連れて不安そうな顔を向けて来る。

なんかいたたまれなさを感じたあたしは、なるべく二人を見ないようにしながらコルベール先生に肯定を返した。

「判りました。

さっさと方針を出しちゃいましょう」

そして、このちょっとした広場のルーンの後片付けをし、頷くコルベール先生に随う形であたしは学院長室に向かった。

コルベール先生は重厚そうな扉の前に立つと、ノックもせずに入りながら叫んだ。

「オールド・オスマン！

ミス・ホーエンツォレルンを連れて来ました！！」

それに反応し、見えない部屋の中から老人の声が響いた。

「うむ、ご苦労！」

ミス・ホーエンツォレルン、部屋に入ってきてくれるかの？」

「はい、失礼します」

あたしはそう言って中に入った。

部屋には、緑髪の妙齢の美人と、どこぞの学園長と同じオーラが透けて見える大魔法使いっぽい格好をした爺さん。

端的に言くと、外見は好々爺に見えるけど、中身は高確率でクソエロ爺っぽいって事だ。

その爺さんが口を開けた。

「はじめましてじゃの、わしは此処の学院長をしておるオスマンという。

こちらは秘書のミス・ロングビルじゃ。

・・・ミス・ロングビル、こちらはカナ・クリスティーナ・ホーエンツォレルン嬢じゃ。

すまんが、彼女と詰めなければならぬ話があるので、よろしく頼む」

「判りました。

では、失礼します。ミス・ホーエンツォレルン」

オールド・オスマンに言われて、ミス・ロングビルはあたしに軽く会釈してから部屋から去っていった。

慌てたせいであたしは頭を下げる事しか出来なかったのが残念だ。

扉が閉まると、すぐさまオールド・オスマンは興奮したようにあたしに話をさせた。

何処から来たのか、その世界はどんな雰囲気なのか、何者なのか、魔法は使えるのか、あの動物は何なのか。

そして、あのルーンはどうなっているのか。

その全てについて、嘘は付かず真実もあたしについて以外で必要部分はばやかしたり、合間合間に才人の話を挟んだりして説明を終える。

すると、オールド・オスマンは羊皮紙を引き出しから取り出すとまるでメモのように乱雑に何かを書き始めた。

オールド・オスマンもキレ者らしく、あたしが嘘を付いてない事や必ずしも真実を言っていない事にも当たり前のように気付いて、それを前提としてあたしの扱いを書きながら考えているようだ。

暫し待つと、オールド・オスマンが突然おかしくなった。

「フオオオオオオ！！」

わし天才じゃね？そうじゃね？

こうすればミス・ヴァリエールの使い魔の方も成り立つしもう。

・・・ミス・ホーエンツォレルンはこれでどうかね？」

向けられた羊皮紙を見ると、数文だけラインが三本も引かれた物が有ったので読み上げる。

「『東方のジャパンなる国の由緒ある高級貴族の令嬢であるホーエンツォレルン嬢』

『土のドットで、ルーンの本来の使用方法を代々家で受け継いできた』

『身分で差別することがなく、領地の平民から愛されていた』

『ジャパンという国での政変により、両親を処刑されてしまう』

『平民の助けにより間一髪屋敷から逃げ出した嬢は、追っ手に捕まりかけた時に、ある平民（ミス・ヴァリエールの使い魔）の前にたまたま出たサモン・サーヴァントの鏡に飛び込んだ』。

・・・それで、あたしはどう生活すれば良いんです？」

設定は悪くないけど、この先の方針が無いことを突くと、オールド・オスマンは手で紙をめくれと合図してきた。

裏返すと、たった一文。

『可哀相に思ったわしは、彼女自身が持つや武術の技能や東方の技術や知識を教えて貰うことと引き替えに、学院に生徒兼客員講師として居てもらう事にした』

働きなさいと書いてあった。

一応オスマンの爺に確認を取る。

「つまり、向こうでの魔法やルーンや政治経済についての講義、そして、黒鍵や槍や弓などの魔法を利用した武器の使い方をお教えろって言うてるの？」

「そういう事じゃの」

あっけらかんといいやがった。

でも、あたしには受けるしか選択肢は無い。

「・・・チツ。

わーかりまーしーたー」。

なら、とりあえず前金としてコルベール先生と爺の血ちょうだい？
血からこっちの知識を得るから」

そう頼むと、既に色々と説明してあったおかげでコルベール先生は
あっさりワイングラスの二割くらいの血をくれた。

爺は『わしへの敬意が見られんからやらん！』とか喚いてたけど、
コルベール先生に無理矢理抜いて頂き、手に入れた。

飲んだら、あんな少量で最低限の一般常識どころか学術的な分野ま
でカバー出来たのには驚いた。

多分二人とも頭がキレる上に元々の知識量が豊富なのだろう。

コルベール先生にはお礼をちゃんとしておいた。

その後、女子寮の空いてる部屋を割り当てられ、授業は明日の午後
から『東方総合学』として始まる事に決まった。

服とかも予備としておいてある制服をくれるとのこと。

あたしの在籍する学年も、召喚者であるルイズと同じということに
なった。

あたしの肉体の年齢は16だから丁度良いと思う。

一番揉めたのはマントだった。

貴族の証だから着けなければならないんだろうけど、あたし自身が人間じゃないせいか区分されることに嫌悪感を抱いた。

結局、『実家が没落した』『平民に愛されていた』というあたしの貴族設定から理由を引っ張ってきたり、学院側の矜持やら体面やらを考慮して、『講師を勤めている時は不問だけでも、生徒の時は学院の規定に沿って学年色のマントを着ける』という内容の折衷案で固まった。

最後に、あたしにこちらの世界の魔法が使えるかどうかを二人の前で試す。

結果、各種のドットレベルとコモンマジックしか使えなかった。

杖は投影した黒鍵でも愛槍でも、しまいにやランサーのイヤリングでも行使出来た。でも、武器どころかアクセサリ類も全部外した状態だと発動しなかった。

つまり、マジックアイテム的な物だったらなんでも杖代わりとしてイケるらしい。

・・・効率が悪いから多分使う機会は少ないだろうけど。

こうして老人と中年と少女の会談が終わる頃には、日もどっぷり暮れて食堂も既に閉まっていた。

かなりイラついたけど、あたしは食べなくてもある程度までは問題ない身だ。

今日は運がなかったと割り切り、割り当てられた部屋に帰る。

辿り着くと、中は中世な感じだった。

なんつーか、天蓋付きのベッドってすげえ。

他の家具も上品な高級さを各々主張した感じの物ばかり。

荷物が無いので使ってやれないあたしを許して。

そんなバカみたいに部屋のモノにオーバーアクションしても、ヒマはヒマだ。

モノが無いからヒマが潰せない。

無意味にベッドの上をゴロゴロしていると、扉を叩く音が響いた。そして、艶やかな女性の声が続く。

「こんばんはー。」

昼間、貴女に杖を向けた者だけど入れて貰えるかしらー？」

脳裏に、赤髪の褐色美女が浮かんだ。

すぐに許可を出す。

彼女はすんなり入って来た。

「お邪魔するわ。」

私はキュルケ・フォン・ツォプレストー！。

此処トリステインじゃなくて隣国ゲルマニアからの留学生よ」

堂々とした態度で自己紹介する彼女。

マントの色からして同じ二年生みたいだけど、スタイルがわがままボデー（笑）系なのでかなり信じたくない。つか、色気がおかしいって。

軽くダメージを受けながら、あたしも返す。

「いらっしやい。」

あたしは佳奈・クリスティナ・ホーエンツォレルン。

・・・一応、爺との談合で東方の国から来た事になってるかな。とりあえず座ってー」

あたしはベッドから降りながら、備え付けのテーブルセットに座るように勧めた。

何か出そうと思い、適当に棚を開けたけど何もない。

「ごめんね、此処飲み物とかまだないんだよね」

謝ると、キュルケはすんなり許してくれた。

「こっちから来てんのにそこまでしなくて良いわよ。ちゃんと持ってきたし」

言葉と共にドンツと置かれるワイン瓶二本。

キュルケは一本抱え込むと、もう一本をあたしの方に押してくる。

そして自分のワインのコルクを魔法で抜き、ラッパ飲みを始めた。

不覚にもかっこよく見えてしまった。

軽く喉を潤す程度に飲んだ彼女は瓶からこっちがドキッとするような所作で口を離すと、部屋に來た本題を突き付けた。

「カナ、貴女いったい何者？

昼間の魔力の集まり方は尋常じゃなかったし、何より魔力の感じに違和感が有ったのよ。

だから、私に教えてくれない？」

既に、コルベール先生と爺との間で青髪の少女と赤髪の女性には聞かれたら事実を話す許可を得ていた。

あの二人はかなり優秀なメイジらしいので、下手に隠したところであまり意味がないという話にもなった。

予想よりかなり早かったけど、教えよう。

あたしは体を直すと、口外しない事を約束させてから、キュルケにルイズ、才人、コルベール先生、そして爺に話した内容やその会話

で決まった事を説明し始めた。

聞き終わると、キュルケは残念そうに呟いた。

「こんなに面白そうな事をあの子に話せないなんてね・・・」

「あの子って？」

気になって聞くと、気だるそうに答えた。

「あー、杖向けた時にあたしの横に居たタバサって名前の青い髪の女の子よ」

「眼鏡かけたちっさめの娘？」

「そう、それ」

そうか、あの娘はタバサっていうのか。

覚えておこう。

あの娘にはキュルケから伝えてもらうか。

「あの娘になら、逆に伝えて欲しいんだけど。

杖向けたということはあたしの何かに反応したって事だし。

そのタバサにはあたしのコトまるまる説明してくれるとありがたいかな」

そう言うと、キュルケはさっきまで纏っていた妖艶な雰囲気捨てさり、あどけない少女のような笑みを浮かべた。

「本当に!？」

カナ、助かったわ。私、あの子に隠し事なんてしたくないのよ」

そして立ち上がると、そのまま『タバサの部屋に行く』と走っていった。

残される軽く戸惑ったあたし。

久しぶりに自宅で疎外感を味わった。

少し凹みながらもテーブルに目を向けると、未開封の赤ワイン。

開封して一気呑み。

そして、あたしは『なににもすることがないから』という老人並の理由からベッドに入っていた。

第二話（前書き）

迷走中なり。

本編も外伝も長期的な構想は建つても直近の構想が思い付かないよう・・・。

マイペースにぼにぼにやるけど。

ちなみに、最近の様子。

釘宮病には罹りませんでした。が、阿澄病に感染しました。
広橋病も中期症状です。

あかし、声オタじゃないのに・・・。

第二話

翌朝はとても良い目覚めだった。

空気は綺麗で湿度も低い。

気候も温暖でなかなか良い所。

そのおかげでかなり熟睡出来たみたいだ。

すっきりした頭で、なかなか可愛い制服に身を通す。

マーリンに貰ったネックレスや弓の指輪と念話の指輪、そしてランサーのイヤリングを着ける。

そして髪を整え、備え付けの姿見で見てみた。

我ながら、なかなか悪くない。

軽くニマニマしながら部屋を出ると、右隣の扉から才人が出て来た。

「おはよう、才人」

あたしが声をかけると、なにやら不満タラタラな様子で才人は返答してきた。

「おー、佳奈か。おはよう。
それで、恨んでもいいか？」

「なんでッ!？」

重低音な声に演歌みたいな事を言われてビビるあたし。

才人はそれに追い打ちをかける。

「昨日の俺の苦勞が判るか？
お前がちゃんと拒否らないでコントラクト・サーヴァントとか言うの受けてりゃ、床で寝なくて良いし、蹴られなくて済むし、なににより女の子の下着を洗わされなくて済むんだぞ!？」

どうやら待遇が悪かったらしい。

でもそれはルイズに言うべきだろーよ。

少しイラつき、才人に突っ込んでしまった。

「あんたさあ、前二つはともかく最後のはむしろ褒美でしょ。ルイズの使用済下着だよ？」

ルイズは世界屈指に可愛いんだから、それってプライスレスだよ？洗う前に使ってもバレないよ？

つか、出会い系どころかただ普通に生活してたらまず出会えないレベルの美少女とキスしたくせに何の文句あるのさ！？」

かなりアブナイけど、あたしの魂で固められたその言葉に、才人は衝撃を受けたらしい。

ノロノロとした動作でガクツと膝を着く。

そして祈り始めた。

「おお、神よ・・・！！」

・・・なんかよく判らないけど、確実に信仰心や清らかさといったモノから、かなり掛け離れた祈りなのはすごく伝わってきた。

それを呆れながら見てみると、その隣の扉からキュルケが出て来た。

「おはよう。キュルケ」

声を掛けると微笑みながら返事をかえしてくれる。

「カナ、おは・・・きゃっ!？」

・・・その前に、祈ってる才人にビビってました。

微笑みはスルーの為かと思ったんだけど、どうやら長身+ソービッ
グな胸で見えてなかったらしい。

・・・あたしが小さいんじゃないヨ？
キュルケが大きすぎるんだヨ？

そんなキュルケは軽く後退りしながらあたしに聞いてきた。

「これ、なんだっけ？」

それに客観的に答える。

「これ？ルイズの使い魔」

「いや、そうじゃなくて・・・。

・・・なんていうか、その、なんかヤバくない？これ」

言われて、真面目に客観的に観察すると、確かにヤバい。

単なる危ない人だ。

職質をパトカーの外じゃなくて、逃げられないよう中でやるようなレベルの。

キウルケははっきり明言はしなかったのも判る。

「かなりヤバいね・・・。

・・・軽く未来にイツちゃってるかも・・・。

・・・そうだ。少し早いかもけどさ、あたし場所知らないし朝食行かない？」

なので、あたしは放置&逃走を企てた。

キウルケもどうこれに絡めばいいか判らなかつたみたいで、即座に頷く。

「そうね、カナは来たばっかで此処のコトが全然判らないものね。彼にはご主人様が居るんだし、先に行っても問題ないわよね」

八割方、自分に言い聞かせる為なんだろうけど、かなり筋の通ったあたし達の言い分が出来た。

瞬間、あたしとキュルケは何に祈っているか判らない異教徒を避けるように淑女の嗜みなんかスルーして走りながら食堂へ向かった。

食堂に着き、二人で息を整えながら後ろを確認する。

良かった、着いてきてない。

もしこれで後ろに居たら、多分あたしは漏らしてた。

恐怖で不思議なテンションに入り込み、あたし達はハイタッチ。

何故かおかしさが込み上げてきて笑い出す。

そのまま笑いながら二年生のテーブルに座り込むと、キュルケの隣に青髪の少女が現れた。

キュルケが挨拶をする。

「おはよう、タバサ。

貴女も見てたけど、この子が例のカナよ。
昨日話したでしょ？」

問われ、タバサは頷いた。

そして少女はあたしと目を合わせると一言だけ言った。

「タバサ。よろしく」

・・・どうやら無口タイプらしい。

眼鏡と無口キャラなせいで『長門さん』とか呼んでみたいけど、それよりはもっと神聖な、なんていうかすぐにでも溶けてしまいそうな雪の妖精のようなイメージを持った。

「あたしは佳奈・クリステイーナ・ホーエンツォレルン。
よろしく、カナで良いよ」

「わかった」

タバサは再び頷くと、一心不乱に目の前の料理を物凄いスピードで食べ始める。

早いのに上品さも残っていて、ただただ『凄い』とだけ素直に思っ
てしまう。

そこに、楽しそうな笑顔を浮かべたルイズが現れた。

「おはよう。

ねえ、聞いて？カナ。

さっきね、着替えを済ませて部屋から出たら、外で待ってたサイト
が突然『ルイズの世話を出来るのは神からのご褒美だ！』とか言い
出したの！

それで理由を聞いたら、『女つ気の無かった人生にここまでずば抜
けた美少女は居なかったし、しかもそんな美少女にお近づきになれ
るコトはなかったって気付いたからだ』って言うのよ！！」

もう変なコト言うんだから、とかニヤケ顔で言っただけじゃあ
ルイズさん。

それを愛想笑いをして聞きながら、あたしの背中にはダラダラと冷
や汗が流れた。

ヤバイ、才人壊したかも。

とりあえずルイズに合わせて、保身に走る。

「そうだねえ。」

でも、才人は間違っていないんじゃないかなー。

ルイズはかなり可愛いから、契約上とはいえキスされた才人にすれば、そうなるのは当然でしょ。

・・・んで、その才人はどこ行っちゃったの？」

「ご飯、昨日食べさせそこねたから、さっき厨房行って『私の使い魔に何か食べさせてあげて』って頼んで置いてきたわ」

昨日のルイズの言動から、平民が嫌いみたいなニュアンスが伝わってきたのに、早過ぎる変わり身だった。

ルイズはあたしの隣に座り、上機嫌で食べ始める。

あたしは胃痛から余ったご飯をタバサに回して、とりあえず暇潰しに厨房に向かってみるのだった。

厨房を覗くと、才人が黒髪のメイドさんとガツシリしたなかなか渋めのコックさんの三人で話をしていた。

才人があたしに気付く。

「おっ、佳奈じゃん。
なにしてんだよ？」

声に反応して、あたしに注目する二人。

メイドさんは軽く怯え気味に、コックさんは軽く不機嫌になる。

「ん、今朝の才人の様子が変だったから見に來ただけ。
メイドさんとコックさんの三人でなんの話してたの？」

一旦二人をスルーした。

「ん？」

いや、普通に雑談かな。

とりあえず朝飯のお礼に、昼飯の時に仕事手伝う事にしたんだ」

「そっか。

空回りしないようにしなね。
んで、紹介してくれる？」

才人は少しだけ、しまったといった感じの表情を浮かべてからまず二人にあたしを紹介した。

「あ、コレは佳奈。」

俺と同じで東方からルイズの魔法でやって来たんだ。

一応貴族だけど、平民とか差別しない奴なんだぜ。

・・・んで、佳奈。

こっちのメイドさんの方がシエスタで、コックさんの方は料理長のマルトーさん」

すかさず挨拶しておく。

「よろしくね。」

シエスタ、マルトーさん」

ペコッとお辞儀すると、二人は何故か目を丸くした。

数瞬後、復活したマルトーさんが聞いてくる。

「・・・なあ、あんたは貴族じゃないのか？」

「はい、ギリギリ貴族ですよー。」

でも、我が家は政争で負けて、もうあたししか居ないような没落貴族だけど。

それがどうかしました？」

あたしは設定に従って苦笑しながらそう答えると、マルトーさんは
気まずそうに返した。

「いやな、平民に頭を下げる貴族なんてそうそうお目にかかる代
物じゃねえからな。
まあ、頑張れよ」

「ありがとう。」

それじゃそろそろ授業なんでそろそろ戻りますね」

そして、微笑んでから帰ろうとすると、後ろから声がかかった。

「カナ、敬語なんて使わなくていいぞー！！
いつでも来い！！」

・・・かなりいい人みたいだ。

あたしは振り返り。

「わかった、マルトーさん！！」

また行くー！！」

そう叫び返していた。

そして、あたしは堂々と教室に向かっていった。

・・・なのに、あたしは今学院長室に居る。

理由は途中でコルベール先生に拉致されたからなんだけど。

拉致の理由を聞くと、あたしは転入といった形になるので、転校生の紹介を最初の授業の先生に任せる為らしい。

そう言われたら断れない。

諦めて少し待つと、小綺麗なおばさんが現れた。

そのミセス・シュヴルーズという名の女性は、爺からあたしが此処に居る理由から設定上の過去話までを聞き終わるやいなや『私を此処での母と思っつかまいません』と涙目で言ってきた。

流石に困り、爺に目線で助けを求めると、ニヤつきながら目で『己でなんとかせよ』と返事が来る。

・・・無責任さにそこそこの腹が立ったので、ミセス・シュヴルーズに『あたしは家を復興させる為に人に頼る訳にはいかない』とか、『あたしよりもあたしを逃がす為に他の貴族に逆らってくれた領民が心配だ』とか、

『オールド・オスマンは最高の人格者で、あたしなんかの為に全力を尽くすと言ってくれた』とか、

なんか表面だけ凄いいいコトを言っておいたら、ミセス・シュヴルーズはいたく感動し、『貴女のその自分を貫く姿は貴族の鏡だ』とか、

『オールド・オスマンはやはり最高の人格者で最良の教育者だ』とか言っていた。

爺はあまりの持ち上げ様にあたしに『たかれるんじゃないか』と焦ったらしい。

つい、『あまりわしのコトは言わなくてくれぬかの』と言ってしまい、その言葉に目を輝かせたミセス・シュヴルーズを見た限りでは逆効果を期待出来そうな感じだった。

煤けた爺と吹き出しそうなコルベール先生に見送られ、教室に向かう。

中に入ると、一列目にキュルケとタバサ、そして最後列にルイズと才人が座っていた。

ミセス・シュヴルーズが口を開く。

「皆さん昨日はお疲れ様でした。
ちゃんと全員が立派な使い魔を召喚出来たようですね。
おめでとうございます」

そこまで言った所で、太った男子が勢いづきながら間に入った。

「ミセス・シュヴルーズ！
ゼロのルイズは単なる平民を召喚しました！！」

その言葉にカチンときた。
ルイズが努力してる事はコルベール先生から聞いたし、実際に座学は学年一位だと聞いていた。

当たり前だけど、本人もカチンときたみたいで太つちょに噛みついた。

「先生！！」

かぜっぴきのマリコルヌが私を侮辱します！！」

「僕は風上のマリコル又だ！
ゼロのくせに生意気なんだよ！」

その言葉で自重を止めた。

ポケットに手を入れながら、先にミセス・シュヴルーズに謝っておく。

「ごめんなさい、ミセス・シュヴルーズ。
後でちゃんと反省するんで、あいつ、少し黙らせますね」

「えっ？」

二人の様子を伺っていたミセス・シュヴルーズは、あたしが何を言っているのか理解が出来なかったらしい。

彼女は狐につままれたような顔になったので、無視して居合拳を放った。

バグッ！という音と共に居合拳は狙い通りちゃんと腹に当たる。

太っちょはうずくまるようにしながら椅子に座り込む。

そんな彼に、トドメとばかりにあたしは澄まして言った。

「失礼、ミスタ。

されど、レディをこのような公の場で虚仮にするなんて器が知れてるわ。

もう少し色々お勉強にされた方が貴方の為なんじゃないの？」

見下すような目で彼を見ると、マリコル又はポケットから手袋を出してあたしに叩きつけた。
そして、杖を抜き叫ぶ。

「決闘だ！！！」

お前、女だからっていい気になるなよ！？
卑怯にも貴族が学ぶ教室で不意打ちをするとは！
そもそもゼロのルイズが『ゼロ』なのは事実じゃないか！！」

その瞬間、キュルケとタバサが可哀相なモノを見る目で彼を見た。

そして、ミセス・シュヴルーズが怒鳴る。

「何を言いますか！！」

此処は神聖な学び舎であり、彼女は本日学院長によって設立された『東方総合学』の講師です！！

仮にも一教師である彼女に勝っても負けても良い事などありませんよ！？」

ムッ。

どうやらあたしが負ける可能性があると踏んでいるらしい。

万が一が無いとは言わないけど、あたしにだって大戦を突破した自負が有る。

つい、抜け道を作ってしまった。

「大丈夫ですよ、ミセス・シュヴルーズ。

丁度良いじゃありませんか。いくら『東方総合学』という怪しい科目とはいえ、学院長がセクハラ要員であたしを講師にしたのか、実力から講師にしたのかハッキリ生徒に示せますし。

命のやり取りをしない、あくまで教師と生徒間の『模擬試合』としての決闘をやればいいだけですから。

・・・ではミスタ・マリコルヌ。

その申し出、受けましょう。

我が友人に謝って貰います」

あたしの口上に歓声が挙がる。

どうやら娯楽は少ないらしく、周囲はマリコルヌの勝ち方・負け方の予想や、それを聞いての勝敗の賭けをし始めた。

ミセス・シュヴルーズは呆れた目であたしを見た後、黙って爺に話

をつけに行ってくれた。

一個借りが出来た。

ミセス・シュヴルーズが戻ってくると、何故か爺も後ろに着いて来ていた。

二人に気付いた生徒達は、悪態をつき姿勢を正して座り直す。

場が静まると、爺は威厳たつぷりに咳ばらいをし重々しく口を開いた。

「模擬決闘の話を聞いた。

して、勇敢にもミス・ホーエンツォレルンに挑んだのは誰かの？」

「はははい、ぼぼ僕です」

太っちょは今更のように震えていた。

その姿を見て、爺は力カカツと笑う。

「そうか、お主かの。」

よし。この決闘、わしが立会人となろう。
わしが制止を掛けるまで本気でやるが良い」

爺の許可発言に生徒達は興奮状態に陥る。

しかし、それを遮る者が居た。

「待つて」

凜として静かなれど意志の籠っている声の出所に視線が集まる。
その先にはタバサ。

彼女は堂々と自分の意見を言った。

「それだと不公平。

カナの魔法行使は禁止にすべき」

タバサの意見が理解出来ず、周りがざわつく。

即座に爺は周りに理由を解らせる為か、気付いているくせにわざと呆けてみせた。

「むむう？

何故そうなるのじゃ？
理由を教えてくれぬかの？？」

「カナの動きは武術の心得が有る事が判る。
かなりの実力者のはず」

それを聞くと爺は一つ頷き、あたしに聞いてきた。

「ミス・ホーエンツォレルン。
杖が無くて良いかね？」

あたしは微笑みながら答えた。

「槍さえ使わせて頂ければ。
無くても良いですが、その場合は少し長引くと思いますよ」

教室に居た全員が大広場に集まる。

左右を生徒に囲まれる中、あたしと太っちょは十メートルほど距離を

取って向かい合った。

爺が叫ぶ。

「両者、戦闘の準備をせよ！」

その声を聞いて、太つちよは杖を取り出す。

あたしは鍊金を唱え1・5m程の棒を作り出していく。

影から愛槍を出そうかと思ったけど、一対一で手加減してやり合うには少し長いし、この先何があるか判らないから、戦闘力や用いる技術を知られていないというアドバンテージは持っておきたかった。

最後に、キュルケにあたしのアクセサリ類全てを預ける。

再び向かい合い、爺が更に声を張り上げた。

「名乗りを挙げよ！」

太つちよがすぐさま叫ぶ。

「我は風上のマリコルヌ！！
貴君の実力、見させて貰おう！」

なかなかのイタさだった。

だけどこれが基本形。

あたしも似た感じに返しておく。

「あたしは矢剣の佳奈。

・・・そっちは詠唱が必要でしょ？

帰りたいからさっさと始めてくれないかな？」

かなり冷たく見下すように。

どうやら彼はあたしの言動でプライドがいたく傷ついたらしい。
すぐさまエアカッターを連続で放ってきた。

しかし刃の迫るスピードが遅過ぎる。

・・・決闘を吹っ掛けてきておいてこのレベル・・・。

興醒めしたあたしは、一方的に實力差を見せつけるコトにした。

使う気は無かった瞬歩。

・・・瞬歩なんつー単なる技術を用いる理由は、瞬動や縮地だと魔力や気を用いる為、バッシングを避けたかったから。

そのおかげで、たかが十メートルを詰めるのに二回も使ってしまったのは内緒だ。

とはいえ達人にしか出来ない技。

普通の人間には突然の、戦闘者には必然のタイミングで太っちょの間合いに入り込めた。

勢いそのまま左手で太っちょの右腕を掴み杖の方向を変え、右手で棒を首に叩き込もうとすると、爺が止める。

「両者そこまでッ!!」

右腕を離してやると、太っちょはそのまま座り込んでしまった。

「勝者は、ミス・ホーエンツォレルンじゃ!!」

あの後、太つちよに『ルイズを意味なく罵倒しない』、『あたしに逆らわない』と野次馬の前で約束させた。

するとルイズが近づいてきて、『あ、ああありが・・・とう・・・・』なんて恥ずかしそうにもじもじ言うからつい抱きしめてしまった。

髪の毛から良い匂いがするし、身体は今にも折れそうくらい華奢だし、顔を真っ赤にしてあたしの胸に埋めるし、なんていうか最高だった。

ついでに、あの程度のネギの朝練にも劣る運動じゃ汗はかかなかつたけど、ルイズに『女の子の嗜み』としてお風呂に連れていかれてしまった。

出て来ると、丁度お昼の時間だったから良かったけど。

そのまま食堂に向かうと、朝の宣言通りに才人は給仕の手伝いをしていた。

早めに食堂に来た奴は既に食後らしく、シエスタと二人でデザート

を配り歩いている。

かなり仲睦まじげな様子に、軽くイラつく。

ちっ、リア充め。

彼はネギ並にフラグ製造機なのですか？

あ、でも、コイツ来る前は出会い系に登録してたらしいしなあ・・・。
。可哀相な子なのかも・・・。

食事をしながらそんな痛々しい少年を見ていると、異変が起きた。

横に居るシエスタがある生徒の落とし物を拾った事が発端となつて生徒自身の二股がその相手二人にバレてしまい、バレた原因となつたシエスタに制裁《八つ当たり》しようとしたのだ！

・・・いやいや、普通に二股するのが悪いっしょ・・・。

才人もそう思つたらしく、同じように突っ込んで生徒の友人達に笑われていた。

でも、タイミングの悪い事に笑われていた彼は、二人の女の子から制裁を食らった直後で感情的になつていた所だった。

その上に平民からの反抗的な態度や、友人の笑い声が重なる。

それがきつかけとなり彼はキレてしまった。

「ゼロのルイズの使い魔は、その主人だけではなく本人も無能で常識知らずらしいね!!」

・・・決闘だツ!!

僕が直々に教育してやろう!!」

そう言いながら手袋を投げつける彼、ミスタ・グラモン。

投げつけられた才人も言葉の内容にキレた。

「黙れ、ボンボン!!」

受けてやるよ!!

今からやるかぁ!!?」

「此処は貴族の食堂だからな・・・。

そうだ、ヴェストリの広場だ!!

ヴェストリの広場に来るんだ!

・・・君は平民だから武器の準備も有るだろう。

少し待ってやるからちゃんと逃げずに来いよ!!」

そう言い捨て、ミスタ・グラモンは食堂から出て行った。

シエスタも泣きそうな顔で『才人さんが殺されちゃう』と何処かに走っていく。

あたしも丁度そのタイミングで食事を終えたので、巻き込まれない
為に才人にバレないように近づき、持っているトレイからケーキを
取ろうとすると、手が空振った。

動いた方向を見ると、邪悪な顔をした才人と目が合う。

慌てて逃げようとする、才人はあたしのマントを引っつかんだ。

「佳奈さん、なんで逃げるのですかね？」

今、がつつり目が合ったと思ったんですけど？」

底冷えするような声。

しかしまだだっ！

まだ終わっちゃいないっ！！

「いえ、少しばかり所用を思い出しまして・・・」

薄いつ！

理由が薄すぎるぞ、あたし！！

才人もそう思ったのか、やはりそこを突かれる。

「所用って何ですかね？」

シエスタいなくなっちゃったし手伝いたいんだけど？」

汗ダラダラ。

やっぱりあたしは才人を壊したらしい。

軽くテンパって来る。

「いいえ、才人様！

わざわざ貴方のお手を煩わせるような事じゃありませんの」

「なら、俺の手伝いもしてくれないかな？
お互い貸し借り無しだろう？」

「・・・・・・・・。」

「・・・・・・・・。」

・・・逆効果だ。

こいつは無限ループくさい。

そう思ったあたしは、早々に諦めた。

「・・・・はあ。」

一応決闘なんだから、あたしは闘う気ないよ？」

折れても戦闘者としての一線を引くと、才人は真剣な顔で言った。

「流石にそんな事しねえって。

俺が受けた喧嘩だから、俺がちゃんと蹴りをつけるさ」

ほう、と真面目に感心してしまう。

なかなか男の子みたいだ。

だけど、数秒で『カッコいいオーラ』は霧散してしまう。

「んで、佳奈に聞きたい事があってさ。

なんであいつはたかが喧嘩なのに俺に武器を持って来いなんて言ったんだ？

殴り合うだけだろ？」

だけじゃねーよ。

先程までと打って変わってカッコ良くなかった。
相手が貴族で魔法使いだという前提が抜けているらしい。

「・・・お兄さん、彼は貴族ですよ？」

あたしは気づくだろうと思ひそれだけを言つと、才人はビビりだした。

「えっ？まあ貴族だよな・・・。

・・・あ、もしかして貴族はフェンシングみたいな剣とかでやり合うのかよ！？」

・・・この子バカだわ。

此処はなんて名前のなんて所なのか小一時間問い詰めたい。

彼にかなり呆れてしまった。

「アンタばかア？

貴族＝魔法使いでしょーよ？此処じゃあ。

つか、フェンシングだろうと多分やられるけど。

・・・そもそも、近々遠距離まで狙える『魔法』というモノを使う相手に素手で挑むバカなの？」

そう言つと、何故かかなりビビられる。

どうやら無意識的に、才人を汚物を見るような目で見下していたらしい。

即座にめちゃくちゃ卑屈になられた。

「しゅみましえん。

素手は無理でしゅう。

ゴミだから判らなかつたんでしゅう。

使い魔めに武器を貸してくだしい」

・・・正直、高校生の男子がいじけながら赤ちゃん言葉使つのを聞いてドン引きした。

鳥肌が立つくらい。

あたしはこのまま赤ちゃん言葉を聞いていたら変な性的嗜好が身に着きかねないと思い、嫌々ながらも手を貸す。

「・・・気持ち悪いからその言葉遣いやめてよ。
んでさ、あたしに準備出来るのは槍と剣と投擲剣だけけど、どれがいいのさ？」

あたしとしては、才人が選んだ武器が槍なら自分のを貸す気だったし、投擲なら工程を踏んだ完成品に近い黒鍵を渡すつもりだった。

だけど、剣は錬金するしかないので、他のと違って概念武装どころか切れるのがせいぜいの単なる金属製になる。

なので剣は選んで欲しくなかったんだけど。

「おつ、良いのか!?
なら剣でよろしく!」

・・・奴は裏切った。

槍と黒鍵使いだって話を既にしてたのに気にせず言いやがった。

しかも、一人でうんうん言いながらムツとしたあたしにトドメを刺す。

「やっぱ剣って憧れるよな!」

勇者っぽくてカッコ良いし。

逆にさ、槍って扱いめんどそうだし、なんか地味でダサくてカッコ悪いよな!」

・・・あたしのパーソナリティが完全に否定された。

何処かで『ばきむ』と心が折れる音がする。

気づくと、あたしは一人ポロポロ泣き出していた。

自分としては気にならなかったハズなのに。

こんな時だけは、肉体に精神が引つ張られていることを自覚する。

いい歳して、あたしはなに馬鹿な事をやっているのだろう。

才人はあたしが泣き始めたのを正面で見たから、かなり慌ててる。

「か、佳奈!？」

おい、どうしたんだよ!？」

あんたのせいだ、あんたの。

そう怒鳴りたかったけど、えづいて上手くしゃべれなさそう。

だから、理由だけをなんとか言葉にした。

「あ、あたし、は・・・ひっく、や、槍使いだもん・・・。
だ、だダサくな・・・うつ、だ、ダサくないもん・・・。」

頑張っただけ言っと、才人は顔色を真っ青に変えた。

そして慌てだす。

「わ、わりい!!」

そんなつもりじゃなかったんだ!!

・・・あ、やっぱし俺さ、英雄の槍ってのを使ってみたいから、良かったら貸してくれないか!？」

・・・あざとすぎる。

あたしを小学生か何かと思っているのだろうか。

そんなもんでコロコロ変わる程、あたしは若くない。

あたしは更に気分を害し、子供みたいな事を言ってしまった。

「・・・良くないからヤダ。

剣はちゃんと作ってやるから、あたしの槍には一生触らせないんだもん・・・」

自分が幼過ぎてムカついたのもあって、出させた本人を睨みつけると何故かニヤつかれた。

イラついたけど、ココで才人に突っ掛かるとあたしの精神的ダメージになりかねないので話題を戻した。

「・・・どんな剣が良いの？
西洋剣とか日本刀とか有るけど」

「あー、そうだな。
どっちの方が良いんだ？」

「し、素人だから、ぐすつ、叩き潰す西洋剣で十分でしょ。
つか、どっち、ひくつ、使ったってどうせあんた負けるしね」

仕返しとしてせめてもの毒を吐くと、才人は軽くビビった様子を見せたので少し気分が晴れた。

よし、創ろう。

既に創り方は編み出している。

後は確固なイメージの問題。

魔術回路を開き、自分の中から『グラム』を龍殺しの意味を抜いてから黒鍵に概念を込め投影する。

龍殺しを抜いたとはいえ、『グラム』はグラム。
積み上げた年月や実績はそのままなのでかなりの業物。

そんな名剣が簞つた黒鍵に、エーテル体を『鍊金』して概念に沿い名剣そのものを形取らせる。

最後に『硬化』と『固定化』を無駄なくらい強力に掛けておいた。

そして完成する『グラム』に限りなく近い無銘の名剣。

『グラムの贋作』と呼ばない理由は、龍殺しの概念を取り除いたから。

ある意味コレは新しい剣なのだ。

一時的にカリバーと名付けたその剣を掴み、鍊金で3サント程の太さの鉄の棒を三本作る。

切れ味を確かめる為にカリバーを振ると、あたし程度の有象無象の使い手でも抵抗なく斬れた。

流石、原型がグラム。

あんなに冒流したのに切れ味は落ちていないみたい。

内心カリバーの力に舌を巻きながらも平然とした態度を取る。
そして振り返ると、その光景を見て目を丸くした才人が突っ立っていた。

良い気味だ。

あたしはそう思いながら、アホっぽい表情を浮かべた彼へ剣を芝居にかけて恭しく受け渡す。

「さあ、才人殿。この剣を携え決闘に向かいなされ。
決闘にも理由が有るのだろう?」

そしてあたしがニヤツとすると、才人はまるで伝説の勇者のように仰々しく受け取り、去り際に聞こえない声で一言残して駆けていく。

その後ろ姿は見覚えのあるモノに似ていて。

雑念というか、気を紛らわす為に放課後の授業の準備をしようと思
い寮に足を向けると、興奮した様子のコルベール先生がうつついて
いた。

どうやら、才人は本当に英雄になれるかもしれないです……。

これはコルベール先生に学院長室に連れてかれた上、ムリヤリ血を飲まされて知ったこと。

なんか、才人の左手のあのマークは『伝説の虚無の使い手』であるブリミルの使い魔のうちの『ガンダールヴ』のルーンだそうです。

もし本物なら、武器を自在に操るといふ能力らしい。

そんな中に降って湧いた本日二つ目の決闘。

そもそも、本来ならば決闘をただけで『反省文＋自室謹慎一ヶ月＋親に連絡』といった泣く子も割腹する魔の三連コンボが来るそう
な。

だけど、此処は爺の年の功。

あたしの場合あたし自身の対人スキルを見れる事と生徒に『東方総合学講師』の実力を示せる事といった利益を優先し、

才人の場合は彼自身が本当に『ガンダールヴ』かどうかを見極める為に黙認や揉み消しをするのだ。

それで、あたしが呼ばれた《拉致られた》のは、

武器を持たなきゃ意味のない『ガンダールヴ』に剣を与えてくれてありがとーね！って話と、

コルベール先生が様子見てたけどあの剣ってどうやって創るん？なあどうやって創るん？見るからにヤバいやん！？って話と、

秘密を知っても問題ない実力者の内の一人として彼の動きに意見してよ？って話だった。

一つ目は爺から特別給与という形でふんだくり、二つ目は今日の放課後にでも説明すると話は即決。

そして一番重要な三つ目の件は、今からちょうど始まる所だったの
で三人で遠視の出来る魔法の鏡を覗き込んだ。

勝負は一瞬だった。

才人はグラモンが出した一体の女性型青銅製ゴーレムをたった一太
刀で切り伏せたのだ。

周りは騒然。グラモンは啞然。

慌ててグラモンは同じのを六体出したけど無駄っぽい。

・・・材質一緒だし。

案の定、簡単に斬り棄てられたグラモンは剣を突き付けられ降参。

決闘開始から三十秒も経っていない呆気ない結末になった。

「コレを見て、君達はどう思ったかの？」

遠視が切れて開口一番、爺はあたし達に渋い顔をしながら聞いてきた。

コルベール先生はまだ興奮しているらしく、即座に反応する。

「彼はやはり伝説の『ガンダールヴ』に違いないでしょう!!
いくらドットと言えどグラモン家の四男、しかも実習ではトップクラスの成績の彼をあそこまで圧倒するとは『ガンダールヴ』で決まりです!!
なるべく早急に王宮に報告をしましょう!」

そんな彼とは裏腹に、爺は冷たく言う。

「コツパゲール君の意見はわかった。

ミス・ホーエンツォレルン、そなたの考えはどうかの?」

爺がクールなので、こっちも気合いを入れた。

「まあ、あれは確かに『ガンダールヴ』なのでしょうね。

武器を操る為の身体能力の向上は目視で確認出来ましたから。

しかし剣術は振り回しているだけで、剣が悪ければあんなにスパツと斬れないはずです。

故に、それ以外はもう少し様子を見るべきでしょう。

とりあえず、王宮には報告すべきではないと思います。

『知識』から見るに、魔法使いを圧倒する平民はごくわずか。

さらにいくらドット相手でも怪我をしないなんて世界でも両手も居たら万々歳って所でしょう。

もしその内の一人ならば『ガンダールヴ』であろうとなかろうと確実に戦力と扱われますから、本当の実力が判明するまで放置がベターだと思います」

・・・まあ、実体験というかもろ紅き翼ですよ。

「そうなのう。

わしもミス・ホーエンツォレルンに賛成じゃ。

しかも、彼はミス・ヴァリエールの使い魔。

わしらが決める事でない。

故に、今は様子見という事で王宮にも報告せず、この事はわしら三人以外には他言無用。

それで良いかの？」

二人揃って頷くと、爺はうむ、と満足げな表情で頷き返した。

その瞬間、学院長室の扉が壊れるくらいの勢いで開け放たれる。

衝撃の大きさに驚き、三人で入り口に視線を向けると、緑の髪を持つ美女が映った。

ミス・ロングビルが息を乱しながらそこに立っていた。

「ミス、そんなに息を荒げてどうしたのじゃ？
何かあったのかの？」

年長で立場的にも最上位に君臨する爺が代表して尋ねると、ミス・ロングビルは整えもせず恐ろしい事を口にする。

「えっ・・・くう、ええ。

先程の・・・決闘後、ミス・ヴァリエールの使い魔が・・・、背後か

ら、観ていた生徒に・・・、不意打ちされ・・・、かなりの重傷です・・・！」

そこまで聞いた途端、あたしは走り出していた。

周りの音は聞こえない。

感情が高ぶったせいか、魔術回路は自分で消せる以上の痛みを伴いながら唸りをあげ、抑えていた気と獄力は制御が崩れていつも以上の勢いで溢れ出してくる。

溢れ出した力が自然と身体強化を行ってくれたおかげで、有り得ない早さでヴェリトリの広場に辿り着けた。

一際人だけが出来ている所に無理矢理飛び込む。

そこには、背中に裂傷と火傷を負いながら俯せに倒れ込む才人、その才人に縋り付きながら泣き叫ぶルイズ、その横で『治癒』をかけ続けるタバサ、ルイズを抱きしめて落ち着かせようとしているキュルケ、そしてゴーレムで才人を囲むように護りながら周囲を睨みつけるグラモンの姿だった。

あたしは即座に叫ぶ。

「彼を救護室へ運びなさい！！
水メイジは『治癒』を、それ以外で手薄な者はレビテーションを
けなさい！！
費用はあたしが持ちましょう。
さあ、早く！！！」

一部の生徒が動き出し、才人を囲んでいたタバサ達も付いていく。
そこにあたしは待ったをかける。

「ミスタ・グラモン。
貴方は待って下さい。

貴方にはゴミにも劣る犯人がどんな奴か教えて頂きたいですし、貴族として決闘を汚した相手には制裁を課すべきでしょう？」

そう声をかけると、頷いて近寄ってきた。

「ミス、それは同意見だが、貴女はただの一生徒ではないのか？」

グラモンは気障にあたしに聞いてくる。

しかし今は、そんな事はどうでもいい。

「無理を通せば道理が引つ込むという話ですよ。そもそも、貴族の風上にもおけない卑怯でゴミ以下で集団でしか動けない雑魚共には、生徒も貴族もくそも有ったものじゃないですから。」

決闘というルールに則ったもので観戦していた人間が勝者に手を出す者など、盗つ人の方が何倍も理性的でしょう」

言い切ると、背後から火の玉と空気の刃が襲いかかってきた。

だからゴミだと言ってるのに。

ため息をつきながら後ろに蹴り込むと同時にランスを襲われた方向に放つ。

脚が触れた途端、二つの魔法はかき消える。

どうやら、完全全力解放は抗魔力が高いらしい。

あたしの魔力の層で霧散したみたいだ。

振り返ると、ランスに組み伏せられている紫色のマントを羽織った

ゴミが二つ。

・・・つまり、上級生らしい。

なるべく心を落ち着かせ、されど身体は高ぶらせて尋ねる。

「貴様らが、決闘後の気が一番緩む瞬間に背後から勝者たる平賀才人殿を不意打ちしたクズ共か？」

あたしの言い回しが気に食わなかったのか、クズはさも自分が正しいとばかりに口を開いた。

「クズだと？」

お前の目は節穴か？

俺達はあの調子に乗った薄汚い平民に教育をただけだ。

なのに俺達がクズ呼ばわりであの平民が殿なんて、頭が足りてないんじゃないのか？

オールド・オスマンにでも聞けば俺達が正しいって言うに決まってるんだぞ！？」

ああ、なんて馬鹿なんだろう。

吐き気と目眩がする。

つい苛立ちを隠せない。

「何処をどう解釈すれば、あの狸爺がそう言うと思うわけ？」

あの爺が実力主義者なのは確実だからそんな馬鹿げた事言うわけ無いでしょ？

そもそも、誇り高い決闘の手順に遵い決着をつけた背後から不意打ちなんて卑怯だから。

そんなものは貴族の名なんて必要ないし、山賊がするようなもの。

そんな人間に教育が出来るなんて思えないわ」

そう吐き捨てると、話していなかった方から火の槍が五本飛んできた。

この前に体重がかかった体勢からだど、なんとか回避出来るスピード。

しかし、後ろには野次馬していた生徒が居る。

あたしは、先程知った抗魔力を盾に壁になる事を即断。

瞬間、五本全部を受け止めると何故か吹っ飛ぶ。

背後から悲鳴。

その声の元を飛び越えて着地すると、痛みと共に傷と口から血が溢れるようにこぼれ落ちた。

クラクラする頭と身体を堪えて膝で立つと、少しだけカラクリが予測出来た。

まず、吹っ飛んだのは火の槍の中に金属棒が入っていたから。

火は抗魔力でかき消えたけど、内部にいた金属棒は不可能。

しかもコイツは先がかなり鋭く加工されているらしく、肋骨と大腿骨が砕けず綺麗に折れているのを感じた。

つまり、内臓なんかすぐに飛び散るという事だ。

怪我そのものに関しては、爺との契約。

完全な人間のふりをするために外側の皮膚や骨などの再生速度が人並みにまで落ちているらしい。

逆に内臓とかの再生は落ちてないし、出力も変わらないので問題は無い。

なので、無理矢理魔力を流し回復速度の底上げを行う。

そして前を見据え、慌てふためく生徒の中心で高らかに尊い《汚らしい》勝利を叫ぶゴミの胴を狙ってあたしの槍を投げた。

更に上がる悲鳴と苦悶。

目算通り、二人の腹に突き刺さった槍は、抜けずに二人を縫い止める。

あたしはさっき才人への指示をした時にあぶれていた水メイジに声をかける。

「あのまま抜かずに救護室へ運んでいつてくれない？
水の秘薬も使って良いから」

そして、忘れていたグラモンにも話をする。

「あと、オールド・オスマンかミスタ・コルベールに救護室で話を聞くよう伝えて。
そろそろルイズ以外は落ち着いた頃だろうから」

二人は大きく頷き、まかせると言ってグラモンは校舎へ、水メイジ

の子は周囲に指示を始める。

それを視認し、あたしは溶けるように意識を外した。

第三話（前書き）

軽いついたーなので、見たくなければ1押してください。

マクロスFの劇場版後編っていつになれば？

ガンダムよりマクロス派です。

ほんの少し、マクロス書きたいかも。

でも、手を出すと火傷じゃ済まないので諦めてる。

久々にアニメを見返した時、『なんで当初劇場版でやるって言ってたミハクラ削ったんだ・・・！』って思ってしまった私は間違ってるのでしょうか。

クランかぁいい。

第三話

目が醒めると、何故か普通にベッドで寝ていた。

どうやらあたしの部屋じゃない、多分寮でもない個室。

時間は読めない。

服は制服。

これでパジャマだったら夢で流せたけど、さすがに無理だった。

だって、血がおもいつきり固まってて穴が開いてるんだもん。

さっきの大人げなさというか、あたしの人間性に若干凹む。

あれがある意味『悪魔』としての素なのだろうか。

少しだけ過ぎたその考えを吹き飛ばし、現実逃避の為に二度寝に入ろうとすると扉が開いた。

「ふおお。」

派手に暴れてくれたのう。

気分はどうじゃ？

血は増やさせておいたが」

入ってきたのは爺だった。

普通だと、此処で入ってきた人間の感情が読めるものなんだけど、和洋問わずこういう狸爺は読ませてくれない。

エヴァの方がなんだかんだで単純というか純粹で判りやすいのだ。

案の定、今回も尻尾の毛一本すら見せない爺。

仕方ないので単なる挨拶に返事を返す。

「あー、ぼちぼちでんなー。」

あえて言うなら槍を出した事はマズったかなと思ったくらいですかね」

微妙に敬語なのはあたしの弱みと運命をガツチリ踏み押さえられるから。

爺は猫のように目を細めた。

「ほう？」

君はあの使い魔の少年と仲が良いのに心配はせんのかの？
自分の罪状を左右するあの二人の状態もじゃ」

そう聞かれて確信した。

この爺は一切合財すべて揉み消すつもりなのだ。

あの言い方はどっちも無事か、最低でも死んじやいない。
貴族の馬鹿達も後遺症は全く無いのだろう。

その上で、あえてあたしを揺さ振ってなるべく優位に立とうとして
やがる。

でもあたしに出来る事は少ない。
それに気付かない振りをして話を続けるだけ。
そして、失点を出さない。

「大丈夫ですよ、問題無いです。

あのまま指示通り救護室に着くまで槍を抜いてなければ、あの二人
は死んでないはずですから。

才人だつてあの程度なら時間が経つてもヴァリエール家の金があれば大抵治るし、

万が一死んじやっても、あの二人の家が社会的にと、経済的にと、
あとは物理的に消え去るだけの事でしょう？」

そう澄まして言い切ると、爺は寧猛に笑った。

「くは、ふははははッ!!」

あれ程までに我を忘れておったのに、そこまで計算しておったとはの!

・・・君の言う通りじゃよ、ミス・ホーエンツォレルン。

君の槍は二人の腸を貫いただけで死に至るような臓器や血管には傷ついておらんかった。

『ガンダールヴ』も細かい傷は残ったが命に別条はない。

有ったら二つの家だけでなく、この学院とわしも一緒に消えておつたろう。

・・・唯一君だけが肺と太ももの大動脈を傷つけておったが、矢を取り除いて『治癒』をかけたらずに元通りじゃ」

さすがこちらには居ない悪魔じゃの、とにこやかに続けた。

あたしは軽く流して質問を投げ掛ける。

「これがなければとうの昔に死んでますよ。

・・・とりあえず、処分はどうなりましたか?

あたしにしる、あの二人にしる。

・・・まさかですが、『グラモン』家の息子と『ヴァリエール』の使い魔に処罰を与えてないですよね?」

家名を使ったのは、此処トリステインの有力貴族だから。

爺も意を汲み取る。

「それはわかっておるよ。

グラモン家の四男にはプラスマイナス0だが、『ガンダールヴ』には見舞金を、ヴァリエール家には謝罪として事実を認めた文と共に少し包んでおいた。

阿呆二人の実家にはそれぞれ仕出かした事とその報復について手紙を出してある。

先程出したばかりだがの、学院の総意として、『生徒が講師とはいえ教育者や他人の使い魔に殺意をもって魔法を使用するなど言語道断』といった旨を力強く書いただけ早く返事が届くじやろう」

「あたしの午後の授業は？」

間髪入れずに二つ目の質問。

爺は苦笑しながら答える。

「そう慌てなくとも問題ない。

今日は午後の授業自体が全て中止になったんじや。

・・・普通に考えれば、そりやそうじやろう？

決闘が立て続けに二件起こった上に、上級生が下級生の使い魔を奇襲するわ、講師に牙を剥くわ。しかもその講師が普通なら死にそうな怪我の状態でありながらも槍を投げ、その上級生の腹を貫くなど今まで起こった事が一度も無かった。

勿論、無かった方が良かったに決まっておるが。

・・・よって、全体を見れば二つの有力貴族が関わっている流血沙汰が起きている時に、授業などやってる余裕が無かったからの。
ミスの授業は明日からじゃ」

・・・少し安心した。

自分の仕事はちゃんとやりたかったから。

麻帆良は『居る』だけで強力な抑止力となれたけど、此処では実績がない。

その分の役割を果たすのは当たり前だ。

「わかりました、オールド・オスマン。
これでトントンということだ」

「そうじゃな。」

ガンダールヴとお主に使った水の秘薬の代金も学院で出すでの、貸し借り無しじゃ。

・・・じゃから、公式な時以外で敬語を使うのは止めてくれんか？
正直、年が変わらんのにそうされるのは痒くてな」

今までの荘厳さは消え、何処か恥ずかしそうに爺はあたしに頼んできた。

年寄り発言にかるゝくムツとしたけど、頼んできた爺の姿が少し可

愛く見え、許してしまう。

あたしは洪々の態で了解した。

「わかったわ、オスマン。

あたしも辛かったから丁度良かったし。

・・・とりあえず二度寝したいんだけど、まだなんかある？」

後ろはガチ。

戦闘での魔力消費はそんなでもないけど、血の形で流れ出た量がそこそこ有った。

今、身体を休めて魔力の回復をしないと、負ける可能性がかなりあるのだ。

オスマンも察したらしく、嫌な顔一つせず応じた。

「ふむ、特にはないの。

傷は全て塞ぎ跡も残しとらんから安心して魔力回復しとくれ。

・・・ではの、佳奈」

扉を開け、出ていくオスマン。

閉まり際に、その背中へ言葉を返した。

「・・・うん、また。オスマン」

二回目に目覚めると、側にはあたしの足元で寝ているキュルケと椅子に座ったグラモンがいた。

「やあ、起きたのかい？」

あたしに気付कि、読んでいた本を側においてグラモンが話し掛ける。

「ええ。

ミスタ・グラモン、もしかして看病してくれてたの？」

そう尋ねると、グラモンは首を横に振った。

「ギーシュで良いよ。

質問の答えだが、僕は何もしていない。

横で本を読んで待つてただけさ。

君の看病はモンモランシーとミス・ツエルプストーがしていたよ。
まあ、ミス・ツエルプストーは疲れて寝てるし、モンモランシーは
才人の方を見に行ってるけどね」

「そつか。なら、ギーシュ。

才人はどんな感じなの？」

「才人は少し目を醒ました後、もう一度寝直したよ。

僕との決闘の後にあの怪我だから体力を使い果たしたんだろう。

・・・傷自体はもう問題無いみたいだ。

少し跡が残ったがね。

でも、死ななくて本当に良かったよ」

安堵したように深く息を吐くギーシュ。

少しだけ良い印象を持った。

そう思い見ていると、ギーシュは突然あたしと向き合う。

「そうだ、君には謝らなくてはならないんだ。

ミス・ホーエンツォレルン。

君が怪我をしたとき、守らねばならなかったのは僕だった。
本当にすまない」

そして、頭を下げた。

あたしは慌てて頭を上げさせる。

「いや、いやいやいやッ!?

あたしは食らっても死なないの判ってただけだからね?

あれは後ろを守る為にあえて当たっただけでギーシュのせいじゃないよ!?

内心ビクビク。

いやーあ、まさかそんな紳士なのだと思ってなかった。

ギーシュはそれでも食い下がる。

「仮にそうだとしても、それじゃ僕の気がすまない。
なにか罰を与えてくれないか?」

真剣さが形になったような目。

ここまでじゃなかったら、『お前ドMかよー』とかで流せただろうけど、そんなレベルを凌駕している。

少し考え、さっきのネタで行く事にした。

「・・・わかった。

なら、あたしの事を佳奈って呼んでくれる？

それで手打ちね」

笑いかけながら手を差し出すと、ギーシュも笑った。

「わかったよ、カナ。

よろしく頼むよ」

そして、話題は才人に渡した剣に移り、明日の授業で見せる事になった。

その後も話は尽きず、あたしは本格的に土のドットを名乗る事にした。

そして翌朝。

血だらけの制服から新品のものに着替え、朝食に向かった。

食堂に入ると、視線があたしに集中していることが判る。

・・・やっぱり昨日はやり過ぎたかも。

内心反省しながらも、誰も死んでないので責められないと開き直って席を探すと、こっちに手を振ってる奴が見えた。

あれはギーシュかな。

そのギーシュの周りには赤、蒼、金の女の子。
ピンクと黒い使い魔は居ないみたい。

とりあえず挨拶する。

「おはよー」。

みんな居るねー。朝から何の話してたの？」

すると、ギーシュは無駄に格好つけて言い放った。

「カナ、君の事に決まってるだろう！

理論は素晴らしく、その技量もとてつもない。

今の僕では敵わないんだ！

精緻かつ高速な詠唱、トライアングルクラスの魔力量と腕前。
君は最高のメイジだよ！！」

恐ろしく事実の含有率が低い。

魔法のランクは最低と大したことないので、事実と異なる事を大声で話すギーシュを優しく叱る。

あたしは大した人物じゃないし、魔法のランクだってドットだから優れてもいない、と。

しかしギーシュは面倒にもあのカリバーの話を持ち出してきた。

「馬鹿な事を言っているのは君だよ、カナ。」

あの風格だけで名剣と判るモノを創り出すメイジが、凄くない訳がないじゃないか！

みんなだって見ただろう？

あのサイトが使っていた素晴らしい剣を！！」

ギーシュは周りの女の子に話題を振る。

まずそれに気怠そうにしながらキュルケが乗った。

「あー、あれね？

あれ、カナが創ったんだ。

・・・そうね、サイトが戦ってる最中に『この剣すげー斬れる！』

って騒いでた事は確かかしら」

次に疑問形のモンモランシー。

「とはいえ、ギーシュのゴーレムは青銅なのよ。
鉄以上の強度が有れば、腕の良い剣士なら誰でも斬れるんじゃないの？」

最後にタバサが静かに興奮しながら反応する。

「それは無理。

相手も自分も動いている中でそんな事を出来るのは一握り。
しかも、あんな綺麗な断面にするには剣が良くないとダメ。
だから、剣も彼もすごい。

まるで……。」

そこで切られた言葉を、キュルケが拾った。

「まるで、『イーヴァルデイの勇者』みたい？」

慈愛に満ちた目で見られた彼女はコクンと頷く。

・・・にしても、イーヴァルディの勇者かあ。

あながち間違ってないな。

『イーヴァルディの勇者』とは、血の知識によると、このハルケギニア全土で愛読されている童話のようだ。

しかし、文の構成は大人にも楽しめ、むしろ大人になって読み返すと味が出る作品らしい。

気になる内容は、勇者イーヴァルディが町でパンをくれた少女の為に悪いドラゴンを倒すという物語。

内容自体は単純だけど、登場人物の対話や発言が意味深らしく、そこが走れメロスのように受けている。

それに対しグラムへの伝承は、ゲルマンの英雄ジークフリートが悪竜ファーフニルをグラムで倒し、その血を舐めた場合は鳥達の言葉が判るようになり、浴びた場合は背中のかからなかった一部分以外不死身になったというもの。

伝承に差異はあれど、基本的には浴びたパターンが有名で、ニーベルンゲンの歌の一場面として出てくる。

あたしはどちらも勇者が悪竜を倒す話だから近いと思ったのだ。

ということで、此処まで見極められてる知識は開放しても一切問題無い。

どうせ開き直ってこういう知識や技術は授業でばらまくつもりだった

だから、前倒しでタバサ達に教える事にした。

「あながち間違ってないよ。

あの剣はあたしのとこの伝承に出てくる剣を模しているから。

創り方や利点とかは今日の授業で教えるけど、あれはイーヴァルデ
イと同じように悪竜を倒した剣なのよ」

そう言うと、タバサは目を輝かせた。

「そう。

なら、早く聞きたい。

・・・私にも創れる？」

「勿論。

まあ、今までの常識と違うかもしれないけど、繰り返せば出来るよ
うになると思うよ」

そして頭を撫でる。

そこにキュルケが加わり今度は二人で愛でる。

・・・ああ、部屋に置きたい。

一通り堪能したあと、ギーシュが聞いてきた。

「そうだ、カナ。」

あの剣はどんな金属で出来ているんだい？

軽く調べたんだけど僕じゃ判らなかつたんだ」

「あれは判んない。」

一回も調べてないし。

詳しくは後でだけど、あの剣は元となる情報に合わせてエーテル体を錬金で肉付けしただけだから。

多分、まともな方法では造れない魔法の金属だと思うよ」

事実を答えると、ギーシュとタバサが驚く。

「そ、そんな凄いモノをサイトに渡したのかい？」

「んー、まあ。」

どっちかって言うと、壊れても良いからあれを創って渡したんだけど」

「あれ程の剣だと壊れる事の方が稀」

「構成はしっかりしたからね。」

壊れたら魔力に戻るモノだから、急に消えたら危ないでしょ？」

言い終わると丁度鐘が鳴る。

このままだと長引きそうだったのでこれ幸いと席を立つと、ギーシユが後ろから叫んできた。

「カナ！！」

授業でもっと詳しく教えてくれないか！？
興味深いんだ！！」

あたしはそれに手を振って答えると、そのまま教室に向かった。

午前中は酷いもんだった。

あたしがキュルケ、タバサ、モンモランシーと教室に入ると、まるでパンダのように周囲から凝視される。

先生が現れても、先生自身があたしから視線を外さないような状態

だった。

更に輪をかけたのは、先生の『ミス・ヴァリエールは彼女の使い魔の看病の為お休みです』と言った時。

みんなの目が『コイツも似たようなレベルの怪我してたよな？』ってビシビシと伝えてきてかなり困った。

だってあたしは治ったんだもん！

あたし悪くないもん！

才人が貧弱なんだよ！！

それが終わったと思ったら次の担当教師がまたギョツとして同じ事の繰り返し。

しかも彼らは、あたしに注目すぎてあたしに実技にしろ座学にしろやらせようとする。

血の知識でなんとかなったけど、あれは疲れてくるから勘弁してほしい。

そしてお昼を食べて午後。

午後の授業はクラス合同らしく、朝の四人が揃う。

端にはコルベール先生とオスマンも立っている。

そんな六人を含んだ大人数の前に立って、お辞儀をしてから授業を開始した。

「皆さんこんにちわ。

今日から『東方総合学』を担当するホーエンツォレルンです。

まず、今日は最初の授業のつかみということで、昨日の決闘であのミス・ヴァリエールの使い魔が使っていた剣を創ってみたいと思います。

ミス・タバサにミスタ・グラモン、お手伝いして頂けますか？」

二人は頷いて前に出て来た。

「助かります。

では、まずあの剣の核を五十本創るので少し待って下さいね」

そう言いながら魔術回路に火を落とし、昨日使った竜殺しの概念を抜いたグラムを五十本全部に落とし込む。

そして投影。

周囲の大半の生徒からは何も無い場所から不思議な形の剣がボロボロ出て来ているように見えるはずで、少数は魔力によって出来ていると分かっている。

どちらも軽く感嘆のため息をついた。

五十本のうち七本は前に残し、二本はオスマンとコルベール先生、残りは生徒に配る。

いくらでも調べていいと言ったので、そこら中でディテクト・マジックが起きた。

それを静めるため、声を張る。

「はい、では皆さん。

此処からこの投擲用の剣からあの実戦用の両手剣に変えたいと思います」

全員がこっちを向いた事を確認した後、再び口を開く。

「しかし、この段階では錬金の魔法を使うのですが、今までの常識を一時的に横に置かないと意味がありません。

・・・ミス・モンモランシ。
通常、錬金では何を元に変化させますか？」

「えっと、土とか岩でしょうか」

モンモランシーは少し不安げに答えた。

「ええ、そうですね。」

他には金属を使ったりします。

今回は、ミスの言った土の発想で問題ないでしょう。
では次に、少し難しいのでミスタ・コルベール。

この世界に魔法的に満ちているモノはなんでしょうか？」

コルベール先生は堂々と答える。

「ふむ、エーテルでしょうな。」

精霊には必要不可欠なモノです」

「その通りです。」

すいません、流石に教職の貴方には常識的すぎて簡単でしたね。

・・・さて、今回錬金するのは、そのエーテルです。この投擲剣に
詰め込まれた両手剣の情報に遵い、欲しがっている所にエーテルを
添えてあげるだけのこと。

しかし、普段エーテルは実体を持たず、それ故に今回はトライアン
グルで感覚としてエーテルを掴んでいるであろうミス・タバサと、

青銅のゴーレムの構成具合から可能性を感じられたミスタ・グラモンにあたしの手本の後、挑戦して頂きます。

その後、皆さんもお配りしたモノを使って試してみてください。

あの剣はまだまだ創れますので」

そして、鍊金の呪文を紡いだ。

魔力の消費が激しいけど、見本なのでゆっくりゆっくりエーテルを鍊金し肉付けしていく。

そしてその分丁寧になり、才人にあげたのより品質が上がったモノが出来上がった。

「こんな感じですね。

では、どちらが先に挑戦いたしますか？」

すると、シュバツとタバサが手を挙げた。

「分かりました。

ミス・タバサ、エーテルが剣に込められた情報に合わせて形取る感覚は掴めましたか？」

「大丈夫、問題ない。
カナを信じている」

今は教師だからホントはダメなんだろうけど、ほんの少し胸が暖かくなった。

「そこまで言ってくれるかー。」

ならタバサ、あたしの創ったその黒鍵を信じてエーテルを錬金してくれる？」

今だけ口調を元に戻す。

「わかった。『錬金』」

タバサが呪文を紡ぐと、エーテルが黒鍵を中心に渦巻き、それが収まると剣が現れた。

解析を掛けるまでもなく完品。

初回で此処までの品質とは、かなりメイジとしての格が高いのだろう。

タバサは完全なカリバーを持って構えると、嬉しそうにしている。

気に入ったようだ。

「流石です、ミス。
ほぼ完璧ですよ。」

「・・・では、次はミスタ・グラモンですね。
貴方はエーテルを感じる事ができましたか？」

そう聞くと、ギーシュは胸を張って答える。

「ええ、大丈夫です、ミス。」

このギーシュ・ド・グラモンにお任せを。

『鍊金』！！』

こいつは公私の区分をはっきりつけてる。
意外とマメだ。

『鍊金』の発動も魔力の通りがかなり良いから、魔法自体を深く理解しているようだ。

さすが元帥の息子といった様子。

これ程の腕でドットという事は、多分あたしにはまだ理解出来てない独自の審査基準が存在するのだろう。

ただ、口ほどエーテルが理解出来ていなかったらしい。

出来た剣は見た目は素晴らしかったけど、解析するとその構成には青銅やその他の金属も混ざっていた。

「貴方は土のメイジである分、固定概念が拭い切れてないようですね。

エーテルの実体化自体は悪くないのですが、読み取りが甘かった部分に対して金属を当ててしまっています。しかし、初回にしては十分すぎる結果でしょう。

二人とも、協力に感謝します。

その黒鍵は杖にもなりますので更に二本ずつ差し上げます。御自由に使って下さいね。

・・・このまま座学に移りたかったのですが時間がありませんね。他の皆さんにも一本ずつ差し上げますから並んでください。

次回の座学では『何故この黒鍵からあの剣を生み出せるか』をお教えします。

課題とまでは言いませんが、少しばかり理由を考えて来てくれると嬉しいです。

その為にお配りするのですから」

そう言い参加生徒全員分の黒鍵を投影して配り終わると、各々ディテクト・マジックをかけたり剣の錬金に挑戦したりしている。

それを見て軽く息を吐くと、オスマンが寄ってきた。

「なんじゃ、お主。

もしかやあれくらいで疲れたのかのう？」

と思ったら、軽くニヤニヤしながら聞いてきた。

ムカつく。

このクソジジイ。

でも事実だから認める。

「そーよ。

あたしは疲れたの！。

黒鍵をそこそこ投影した上に、かなり丁寧かつ低速で錬金をしたんだから無駄に魔力使ったの！。

・・・そうだ、オスマン。

あんた黒鍵もう一本あげるからやってみなよ」

あんま突かれないのでそう吹っかけると、オスマンは狸の笑い方をする。

「ふおおおお。別に構わぬぞ。

ほれ、『錬金』」

すると、オスマンが持っていた黒鍵が剣に変わっていく。

数瞬の後、彼の手には完成された光り輝く名剣グラムが在った。

瞬間、負けたと感じた。

誰でもすぐに判る。

これはさっきのあたしのベストに匹敵するかそれ以上の代物。

魔法使いの格としては勿論向こうの方が段違いに上だけど根本となる技術はこっちのモノで、創造方法も一回ハルケギニアの常識から離さなければならぬような突飛なモノ。

なのに、この年老いたオスマンは誰よりも手際良くこなして見せやる。

『精神は肉体に引つ張られる』を地で行くあたしとエヴァにとって
は理不尽そのもの。

つか、何のために普段の自分達の子供っぱさを我慢してると思っているんだ！？

思考があまり固くなく、若さが生かされる柔軟な発想が出来るから
なんじゃーッ！！

正直、成長出来るもんならあたし達だってこんなロリな体型じゃなく
くてナイスバデーなお姉ちゃんになりたいわッ！！

・・・でもなれないからちっちゃい事の利点を並べて紛らしてるの

に、爺が利点を持つてくんじゃねえー！！

その恨みという名の殺意を得意げにしていたオスマンへ強力にぶつけると、ガタガタ震えだして『仕事があるから帰る』とさっさと逃げ出した。

グラムを抱え込みながら。

あたしの肩に使い魔のネズミを置いて。

殺気ではなかったのに反応した勘の良さに腹が立つ。

そのまま今度は一年生へ。

今度は一人。

コルベール先生はついて来たかったみたいだけど、授業があるらしく渋りながら戻っていった。

一年生に対しては、まだ授業は魔法の概論だろうから『マギ』について説明した。

問題になりそうな事はネズミが教えてくれるだろうと開き直り、向こうの魔法使いについてボロボロ吐き出す。

メイジとマギの違いから、仮契約と本契約、マギステル・マギなど幅広く説明。

聞いていた一年生は衝撃を受けていた。

かなり良いところで鐘がなってしまったので次回はどうしようかと考えてると、一年生に次の授業で続きを聞かせてくれと囲まれてしまった。

どうせ計画は立っていないので即座に了承。

三年生の教室に向かう。

静かな廊下を通って談笑の声が聞こえる教室に入ると、その途端静まり返ってしまった。

しかも何故か皆がみな背筋を伸ばしていて、『サー、イエッサー』としか返事が来なさそうな状態。

此処は男子しか居なかったので、王軍に入る生徒ばかりを集めたクラスなのかと涙目になりながらも推測し、一応最前列に居た子に

『此処は何故こんなに固いのですか？もしや卒業後は王軍に入られる方を集めたクラスなのですか？』と聞くと、その生徒は大きく首を振り、『違います。ミスは厳しいとの噂を聞きましたので全員粗相が無いように気をつけているだけです』と云われてしまった。

そんな勘違いは当然勘弁願いたいので、慌ててもっと緩く形だけの敬語で、あたしは後輩なんですからと強く主張するとやって生徒は柔らかくなった。

仕切り直し、王軍に入る予定を聞くと六割くらいが手を挙げてみせた。

挙げてない人間には長男だったり家が大きくて割り振られる仕事があったりするようだ。

次に、強くなりたい希望を聞くと全員が手を挙げた。

気にかかり、軍に進まない者に『何故強くなりたいのですか？』と聞くと、『暗殺されない為』や『戦争ではどっちにしろ諸侯軍として参戦しなきゃいけないから』といった答えが返ってくる。

ならば、このあたしが強くしようではないかッ！！

少しばかりテンションの上だったあたしは、鍊金で剣を人数分鍊成してみせ、彼らに取らせてから発破をかけてみた。

「今から、貴方達の常識を破る為に模擬戦を行います。
魔法の使用は可。

試合時間は10分。

気絶及び重傷で戦闘離脱。

敵はあたし一人。

あたしの武器は槍のみ。

あたしは身体強化はしますが、攻撃魔法は使いません。

そちらはあたしに少しでも傷をつけたら勝ち、あたしは全員の剣を身体から離させるか10分間逃げ切ったら勝ちというルールにします」

130

しかし、なにやら反応が鈍い。
勘弁してほしいといった様子。

仕方ないので、少しでもやる気になってくれる奴がいればと無いよりマシだと思われる賞品をぶら下げてみる。

「ふむ、やる気が出ませんか。
ではこれでそちらが勝つたら、起伏に乏しい身体ですし、あたしでは役者不足でしょうけど、希望者全員と夜伽を致しましょう」

そう言った瞬間、一斉に集まってくる。
そして、さっきの人が鼻息荒く聞いてきた。

「えっ？本当に！？」

貴族たるもの、やっぱり無しという事はないよな！？」

負ける訳がないので澄まして答える。

「ええ、勿論。

家名に誓って、そんな事はしませんわ。

約束は守ります」

すると後ろの方から声がかかる。

「いや、そんな事を言うなんて腰の軽い誰とでも寝る女なんじゃないのか？」

その物言いに軽くム力つきながらも同様に答える。

「いいえ、男性自身は見たことはありません。

正真正銘ヴァージンですの。

それに、それはそちらが勝ったら判る事じゃなくて？」

最後だけ流し目で言うと三年生はかなり盛り上がって、我先にと模擬戦で使用される教練場へ走っていった。

結果は、言うまでもなかった。

開始三十秒でケリがついてしまった。

その方法は単純明快。

剣で挑もうとした者には槍で手を叩く事で剣を落とし、杖で挑もうとした者には縮地でスツただけ。

その結果、杖で挑んだ奴がパニックを起こし、仲間割れが起きて即座に壊滅。

仲間割れの原因には、誰があたしの処女を奪うかといったものもあったらしい。

今、教練場ではガッツリ気絶している者とそれを治療しながら泣く水メイジ、掴み合いながら責任をなすりつけ合うその他が居た。その他の中には『俺が初めてになるのを望まれてた』とか寝言は寝て言え組もゴロゴロ居る。

つか、疑問が有る。

彼らのやる気具合だ。

いくらあたしがある程度整った顔の持ち主でも、アジア系は白人に比べて断然幼くなるものなのに不思議だった。

しかも、あたしはお世辞にも胸が大きいとは言えない。

そして、身体年齢16歳。

もしや、ロリコンばつかなのですか？

．．．．．。

．．．少しだけ、気づかなかった事にしよう。

誰もかれもが色んな意味でダメになっていたので、模擬戦の考察は次回に回す事にする。

そして、その他に当て嵌まった連中に罰ゲームとして魔法無しで教練場の整備を命じておいた。

そしてあたしはさつさと切り上げ学食に。

食後ルイズの部屋に顔を出そうと思い早めの夕食を取っていると、思惑を外すように才人とルイズが揃って現れた。

才人は若干傷が痛むらしくゆっくり歩いていて、ルイズはそれに寄り添うように合わせている。

「こんにちは。

ルイズ、才人の怪我はどう？」

席に先に座ってた者として声をかけながら席を立つ。

そしてルイズの椅子を引いて座らせ、更にその横の椅子に才人を座らせた。

「あら、ありがとう。

ええ、多少痛みはするみたいだけど寝てなくて良くなったわ。ねえ？サイト？」

才人はその呼び掛けに頷く。

「ああ、医者にも問題ないって言われたからな。

あの学院長も太っ腹に、『見舞金』って言って凄い額の金貨を袋でくれたらしいんだ」

何故か胸を張る才人に話を付け足す。

「あ、それ聞いたよ。

ヴァリエール家にも謝罪としていくらか送ったってオスマン言ってたわ。

『ヴァリエール』の名前は強いから、今頃あのバカ二人の家からも色々送られてると思う。

ルイズに感謝しなよ？」

ルイズはあんまり嬉しくなさそうだ。

もしかしたら、才人の実力でそうなった訳じゃないから認められないように感じてるのかもしれない。

しかし、すぐにそんなモノは才人の発言で吹っ飛んだ。

「そう！

そうなんだよ！！佳奈聞けよ！

ルイズ、わざわざ枕元で看病してくれてたんだぜ！？

起きたらルイズのベッドに寝かせて貰ってさ、足元見たら椅子に座ってベッドにもたれかかるようにルイズが寝てたんだ。

俺ってルイズに借りばっか作ってんのにそこまでしてくれるなんて素で驚いたんだよ。

こんな美少女で性格も優しいなんてサイコーだよな!？」

才人、壊れたかと思うくらいルイズをベタ褒め。

ルイズは赤くなりながらも『調子が良いだけなんじゃないの?』と胡散臭そうに才人を見てるんだけど、本人はそれに気付かず純粋な目で褒め続ける。

いやむしろ、才人は褒めるつもりはなくて、こんな事してくれたと嬉しそうに語っているだけ。

それに気付き、ルイズが耳まで真っ赤になると同時に最後の『ルイズサイコー』発言。

今度はルイズが壊れた。

「ななななに言ってるのよ、あああんだ。

あ、あんだだって聞いたわよ?

ギーシュとの決闘はあたしをバカにされたからだって。

私、聞いた時すっごい嬉しかったんだから。

ギーシュとの決闘も圧倒的だったし。

・・・その後は不意打ちだったからしょうがないわ。

むしろ、サイトが凄すぎたからビビってあんな事してきたに違いないんだから胸を張りなさい。

あ、あんたはわ、私の大事な・・・つ、使い魔なんだからねっ」

・・・甘々ルイズに萌えた。

あれ？

でもこの娘、気が強かったよね？
出会って三日でこんな変わるの？

あたしの疑問をよそに、二人の親密度は二次関数的に上がっていく。

「ああ、判ってるよ。

俺はルイズを守る。

ちゃんと約束するよ」

「本当に？

ちゃんと私を守ってくれるの？」

「当たり前だろ？

絶対守るよ。

ルイズがくれたこの左手のルーンが、ルイズを守る為に武器の使い方教えてくれるんだよ」

「サイト、ありがとう・・・」

「言っなって、お互い様だろ？」

・・・神様、ごめんなさい。

お腹いっぱいです。

頭が溶けるか腐るかしそうなんです。

勘弁して下さい。

あたしの祈りが届いたのか、才人が口を開いた。

「そういえば佳奈、剣ありがとうな。

助かったよ。

コイツのおかげでギーシュに勝てたもんだ」

「いやいや、大したもんじゃないからあげるよ。

壁とか壊さなきゃいけない時に使って？

一応壊れる可能性が有るから、メインには使えないのでルイズに剣を買ってもらってね」

「わかった、助かるわ。

サイト、今週の虚無の曜日に町に行きましょう。

貴方の剣や必要なモノを買うの。

・・・にしても力ナ、色々ありがとう。

サイトの剣も創ってくれたし、あの時焦ってて周りがよく判らなかつたけど、大怪我をしてまでサイトの仇も討ってくれたって噂になってるわ。

貴女には感謝しきれないわね」

目を輝かせるルイズ。

可愛い分だけ何処かラリってるような感じで少し恐い。

わずかに引きながらも話を流しにかかる。

「ううん、あたしは大した事してないから。
だから別に気にしないで？」

ルイズも才人も知ってるでしょ、あたしが死なないの。
だからそうしたままで深い意味はないから。
それよりもさ、ギーシュとはどうなったの？」

「ダメよ、カナ。」

そうやって煙に巻くのは許さないわ。
ちゃんとお礼させて頂戴？

ギーシュなんて今はどうでもいいんだから」

・・・あっさり失敗した。

ギーシュじゃインパクトに欠けたらしい。

正直、お礼自体は嬉しい。

だけど、これは個人的な反感も含んだ行動であつたし、治療費は学院負担、お咎めも無しと生徒と戦ったのに破格の待遇だ。

そしてオスマンの言い方だと、今日明日には二つの家から色々な迷惑の入った品が送られてくるだろうし、受け取るのも黙認された。

怪我した対価は頂ける。

貰えなくてもあたしは友人から巻き上げるつもりは一切ないし。

なので、もう一回抵抗した。

「別に良いって。

あれだよ、友達助けるのに打算は入っていないからさ。逆に今度あたしが困ってたら代わりに手伝ってよ」

そう言っと、ルイズは渋々折れた。

「・・・そう、わかったわよ。

そこまで言われたら引くわ。

その代わりちゃんと色々なこと相談してね？

じゃないと力になれないんだからね」

そして二人は食事を始め、あたしは席を立った。

食事が早かったせいで風呂も一番乗りだった。

エヴァの別荘のやつより更に広くて良い感じ。

・・・ちよつとハマった。

風呂からあがって部屋に帰ると、オスマンが現れた。

即刻、コマンド：追い出すを選択してノックもなかったエロジジイを蹴り出すと、反転しながら叫んできた。

「ちよ、ちよつと待ってくれ！

お主に荷物が届いたんじゃ！！

あの二つの家からのだからの、わしが直接持つて来た！！」

あたしはそれを軽くあしらう。

「そんなもん、明日の朝でもいーでしょーよ。

つか、乙女の部屋にノック無しで入ろうとするな、エロジジイ」

「えっ、乙女・・・？
カナがか・・・？
わしとほぼ同級のくせにか・・・？」

その瞬間、目の前の奴は年甲斐も無く恐怖で身体を固めた。

「・・・ねえ、オスマン君？
あたしの全身ちゃんと見てます？
あたし、身体自体は16歳キープしてますの。
十分うら若き乙女でしょう？
それでさ。」

「・・・誰が、・・・誰が誰の同級だって言った・・・？」

すぐさまオスマンはガクガクと頷きながら、昼間の当初の三年生のような態度に変えた。

「サー。」

ミス・ヴァリエールやミス・ツエルプストーと、年齢不詳のミステリアスなスレンダー美少女、小悪魔賢者 カナ・K・ホーエンツォレルン嬢が同級だと言いました、サー」

・・・持ち上げようとすすぎて、何か地球を護るために働いてる感じになったけど仕方ないか。

あたしは横柄に許しを出す。

「よろしい。」

・・・それで、何が送られてきたの？」

「そうじゃな、合わせて約二万エキューかの」

すぐさま持ち直したオスマンは、あっさりとバカバカしい事を抜かす。

つい、そのまま聞き返してしまった。

「はっ？」

いやいや、オスマン君。

何を言っているの？

本当なら一生働かなくても生きていける額じゃない。

・・・冗談でしょ？」

最後の方は軽く絶る勢い。

たかがこんな事で家が潰れたら後味悪すぎる。

しかし、オスマンは肯定した。

「よく言う。」

かなり慎ましく使つても、カナの生涯の一割も満たせんじやろう。

・・・それはさておき、この話は本当じゃ。

あの馬鹿共は伯爵家の長子らしくての。

あんなんでも家を継ぐ立場だそうじゃ。

・・・どうせ経歴に講師に牙を剥いたなどの泥を着けるわけにはいかなかったただじやろうに。

まあ、個人的にカナの境遇に同情して少しばかり金をくれたようじやな」

・・・なんだ、伯爵家が。

心配して損した。

金が有つて当然だ。

つい、二人の器の小ささから実家は零細貴族だと思い込んでいた。

「そう・・・、意外だわ。

あんなんじゃ次代で潰れかねないでしょ。

・・・にしても二万エキュールか。

ねえ、オスマン。

あんたがあたしならどう使う？

念のため五千残すとしても残り一万五千だよ？」

今は経済的にオスマンにわずかにでも借りがある状態なので、尋ねてみた。

借り自体は講師の給与から天引きされるだろうけど、この世界で長年生きてきて得た勘というモノの意見が聞きたかったのも有る。

オスマンは少し考え込んだ後、なかなか面白い事を提案してきた。

「そうじゃなあ・・・、こういうのはどうじゃろう?」

今のお主は対外的には東方の没落貴族。

同僚や周囲にも『家を再興させたい』と言っておる。

しかし、母国での没落理由は政争で負けたからであるし、そもそも彼の地は到達し戻ってきた者を聞いた事が無いほど遠い。

故に、新興国であるゲルマニアで新たに家を作るべく爵位を購入する、といった感じかの」

あたしは、この提案にかなり驚愕した。

そもそもあたしの中でこのお金は泡銭。

遊んで使うなり、道楽で何か作るなりしか思考に無かった。

そんな中、貴族になるという選択はまさに青天の霹靂。

オスマンに舌を巻く。

「貴族か・・・。

全然考えてなかった。

少し考えてみる」

やはり年の功は違う、とオスマンに感謝しながらその意見を尊重する事にした。

オスマンは去り際に、何故か判らないが少し切羽詰まった様子であ
たしへ不可思議な言葉を残していった。

『貴族も平民も、あのエルフでさえも無意識下に持つ苦悩が有る。
それは生きる事であり、死ぬ事でもあり、朽ちていく事だ。』

その言葉は、あたしとオスマンの在り方を断固たるままに否定して
いて、しかしながらあたし達にも当て嵌まるものだった。

最低でもあたしは、死そのものは恐れていないけど存在が消えると
いう事に恐怖を抱いている。

あたしが死ぬということは、文字通りの消滅を指すから。

・・・墓もくそも無いのだ。

肉体自体が残らないのだから。

空っぽの墓など、誰も見に来ないだろう。

そもそも、見に来てくれるような人を残せるだろうか。

無意識のうちに考えないようにしていた事に思考が行き始めたので、あたしは無理矢理自身を律し一旦クリーンにした。

そして、まだ先は長いと言い聞かせる。

その日は珍しくなかなか寝付く事が出来ず、あたしが無意識の内に『眠る』事で『人間』から離れないようにしている事に気づいた日にもなった。

第四話

・・・初めて、部屋のノック音で目が覚める事となった。

時刻は判らないながらもいつもより少し早そう。

こんな朝っぱらから尋ねてくる奴は居ないと思う。

だけど、完全に目が覚めてしまったし、なんかあったかも知れないから一応開けてみると、シエスタが立っていた。

・・・やっぱりなかなかの美少女だ。

素朴な感じながらもはちきれそうな胸が受けそう。

・・・悔しくなんかないもん。

目に入れて一秒でシエスタの再評価を下すと、シエスタは安堵したようにあたしを見た。

「カナさん、お休み中の所申し訳ありません。

先程、カナさんにお客様がいらっしゃいましたのでそのご報告に参りました」

あたしに客？

学院以外で知り合い居ないのに？？

あと、あたしに敬語はやめて欲しい。

とりあえず、お礼しないと。

「わざわざありがとうね、シエスタ。

あたしに対してはもつとフランクで良いよ。

それで、客って誰か判る？」

そう尋ねると、シエスタは有り得ない人物の名前を出した。

「判りました、カナさん。

では、そうさせて貰いますね？

カナさんへのお客さんはヴァリエール公爵夫人ですよ。

自らマンティコラでいらっしやったみたいです。

衛兵さんが驚いちゃってました」

ヴァリエール公爵夫人。

ルイズのお母様。

すぐさまオスマンの無駄な知識がいらん情報を流してきた。

若い頃は烈風カリンという名で男装しつつ、トリスティン魔法衛士

隊に在る三隊の内のマンティコラ隊の隊長をこなしていた。彼女自身の伝説も多々在るが、彼女の下に居たマンティコラ隊も凄いらしく、彼女が居た当時ではエリートと呼ばれる魔法衛士隊の中でも更に精鋭とされていたみたいだ。

勘弁してほしい。

あたしは何もしていない。

そんな大物に目をつけられる程には馬鹿でないつもりだし。

しかし、現にあたしに会いに来ている。

追い詰められたあたしは、こんな時にしか使えないお願いポーズをシエスタに使ってみた。

「お願い、シエスタ。

あたしはオスマンが昨夜激し過ぎて腰が立たないから後日お伺いしますって言っておいて？」

勿論、上目遣い。

目を潤ませながら、小動物チックなオーラを出して。

しかし、シエスタには全然効かなかった。

「何を言ってるんですか、カナさん。
普通、オールド・オスマンの歳を考えたら逆だと思えますよ？
そもそも、そんな言い訳じゃ部屋に直接来られるだけです」

ほら、早く行きますよ、と急かすシエスタ。

既に会う事は避けられそうに無かったので、せめてもの犠牲の山羊を用意するため少し待って貰った。

訳も判らず連れてこられた可哀相な寝ぼけた寝巻き姿の山羊は、唯一のまともな服である制服を着たあたしと一緒に客を待たせている部屋に入った途端、瞬時に目を醒ました。

「お、お母様！？」

そう、山羊はルイズ。

干し肉にされる事に気付いて今更メーメー鳴いても遅いのだ。

・・・どうせ、あたしに会いに来た理由を作ったのはコイツだろう

から、ある意味自業自得でもあると思うけど。

その驚いたルイズにさも当然と言わんばかりにヴァリエール公爵夫人は口を開いた。

「そうです、母ですよ。

何か問題でも在るのですか？」

態度は柔らかいが眼光は鋭い。
ルイズはすぐに萎縮した。

「いいえ、有りません……」

「よろしい。

……失礼、貴女がミス・ホーエンツォレルンですか？」

すぐにあたしに矛先が向く。

……山羊は役に立たなかった。

もつと時間ちよーだいよ。

あたしは腹を括り、公爵夫人が来ている事に気付きながらスルーし

ているオスマンを呪いながら自己紹介をした。

「ええ、そうです。

ヴァリエール公爵夫人に零細でしかない家名を覚えて頂けるとは、とても光栄に存じます。

改めて名乗りを。

私は、佳奈・クリスティーナ・ホーエンツォレルンと申します。

ルイズ嬢の学友をさせて頂いております」

そして一礼。

公爵夫人はそんなあたしの緊張を無視して話しだした。

「零細だなんてとんでもない。

貴女は東方の有力貴族の娘だったそうですね。

ルイズから手紙で聞いています。

ルイズを庇い決闘してくれた事も、ルイズの使い魔の為に伯爵家の長子二人を相手取り重傷を負いながら仇を取ってくれた事も。

正直、かなり嬉しく思いました。

如何せんこの子は跳ねっ返りが強いですから、主人と心配していたのです」

「はあ・・・」

やっぱりお前か、と元々ちっちゃいのに更にちっちゃくなっている

ルイズを横目で睨みながら、公爵夫人がわざわざ朝っぱらから来る程の話じゃないことに気付いた。

不信感いっぱい。

だから、気のない返事しか返せなかった。

しかし公爵夫人は気にする様子もなく、ついに本題を切り出す。

「私がこの場にきた流れをお話しましょう。

・・・実は昨日、我がヴァリエール家の屋敷に二つの伯爵家からの使者が揃ってやって来ました。

対外的には色々な思惑が重なり一昨日の件は無かった事にされたようですが、起きた事は事実。

その使者は学院内で起きた事を私に話し、当家に非公式に謝罪。

そして、責任を持ってルイズの使い魔の治療費と賠償金を払う旨も申し出て来ました。

そこまでは落ち着いた話が出来たのです」

そこで一回区切り、公爵夫人はシエスタが入れた紅茶に口を付けた。

「しかしその時、オールド・オスマンからの書簡が届きました。

大まかな内容は使者が伝えてきたものと変わりありませんでしたが、一つだけ事実が異なっていたのです。

それは、『新任の講師が他の生徒を庇い重傷を負いながらも二人に

制裁を課した』という部分。

すぐさま私は使者に激昂してしました。

何故ならば、使者は実行した二人は己が仕出かした事にすぐに後悔して大人しく教師に従ったと言ったからです。

話が違うと怒鳴り付けると、その二人や色々な筋から聞いたであろう真実を語ってくれました。

それが貴女の事。

片方の人間と話している最中に不意打ちのように攻撃されながらも後ろの生徒の事を第一に考え、あえて盾になるその清廉さ。五ヶ所も金属の棒で身体を貫かれながらも、敵を殺さずに高ダメージを与える為に槍を投げる事で急所を避けつつ腹を破るその実力。

魔法を一部無効化したらしい事も仄めかしていました。

それを聞いて私は、若い頃の血が騒いだと言いますか、貴女を確かめたくなり、使者を追い払った後すぐさま屋敷をマンティコラで飛び出してしまった。

・・・貴女さえ良ければ、模擬戦の相手を引き受けて貰いたい。いかがですか？」

・・・今まで生きてきた中でも五本の指に入る闘気の籠った目で見据えられた。

ルイズはここまで純粋な気を出している母親を見た事が無いのか、息を飲んでいる。

あたしはここまでの気を出す相手が弱い訳が無いので泣きそうになっていた。

彼女は確実に紅き翼のメンバー入りが出来る実力を持っている。

座ってる様子にも隙がほとんど無い。

此処ハルケギニアでの最強の一角と言える。

そんな人物とやったら再生が追いつかないかも。

しかし、もう一人の自分自身はその申し出に歓喜していた。

人間の身体ながら、あの一線を超えた奴らに追いつける才能。

見た目が年齢不詳だけどルイズの歳から考えても17年は軍務から退いているのに未だに鍛練を欠かしてないのが透けて見える努力。

それだけで尊敬に値する人物。

これは、全力でお相手をしないと失礼に当たる。

そして、全力で当たらないと負けるビジョンが思考の端から消えないだろう。

なら一つだけ聞いて、それからあたしの秘密を明かすか決めよう。

「公爵夫人。

模擬戦自体は私程度で良ければお受けしましょう。

しかし、模擬戦はどうなさるおつもりで？
武術・・・、剣術や槍術の腕前を競うのか。
魔法の技能を競うのか。

それとも、持っている総てを引つくるめた総合力を競うのか。
貴女の求めるものをお聞かせ頂けますか？」

この時、既に秘密を話す覚悟をしていた。

彼女が選ぶのは総合力だと予想出来たから。

単純に魔法の腕と武術の腕を足して考えた場合、勝つのは向こう。

それをイーブン以上に持つていくには『氣と魔力の合一』なんて出し惜しみじゃなく、魔族化か竜化しないと無理だと気付いている。

しかし彼女は、あたしの予想を覆した。

「・・・それでは、武術の腕を競いましょう。

正直な所は貴女とは全力で闘いたいのだけど、それでは学院が持たないかもしれません。
真に残念な話ですが」

良かったあー！

ほんと常識が有る人で良かったあー！

内心叫びつつ、ポーカーフェイスで条件のすり合わせを行う。

「身体強化の魔法はどうなさいますか？
あと、敗北条件はどうします？」

目を輝かせて公爵夫人が乗ってくる。

「身体強化は使いましょう。
敗北は、身体を中心線上幅10メートルの間で一撃を貰ったら、
武器を取りこぼしても格闘を続ける事にしましょう」

しかもなかなかエグいというか、ガチに近い。
多分武器の刃を潰す気は無い。

でも、明日への希望を信じて一応聞いとかなきゃ。

「使用する武器については？」

「普段から使っている物を。
治療に関しては当家専属の医者連れてきましたから、安心して下さい。
秘薬も大量に持ち込みました」

やっぱ無かった。

あたしの明日への希望も無い。

当たり所が悪くて死なれたらあたしも死亡。

だからと言って隙をわざと作るなどの手加減をしたらすぐ気付かれて目も当てられない状態に陥る。

あたしは社会的に死ぬ可能性を抱えながら本気で挑むしか選択肢が無いのだ。

あたしは若干ブルーになりながら、公爵夫人に答えた。

「判りました。

では、中庭で行いましょう。

外でないと全力を出せませんからね」

結果、戦闘は昼過ぎまで続きました。

一応、始まる前にオスマンを叩き起こし、午前中は無理矢理公欠に

させた。

公爵夫人との戦闘は疲れる事が予想出来たから。

だけど、午後の授業はしなかったので魔力を出し惜しみ、強化を『
気』だけにしたことがマズツた。

そんなレベルの相手じゃないのにも関わらず。

レイピアで軽く触れるだけで槍の軌道を逸らすわ、すぐさま斬り掛
かってくるわ、瞬歩で後ろを取っても反応するわ。

とてつもなく恐ろしい反射神経。

居合拳にも初見で反応し、一発目は回避、それ以降は剣圧で相殺。

しかし、こちらも足を止めずに向こうに攻めさせるきつかけをな
るべく潰しにかかり、攻守が入れ代わっても小技で奪い返す。

それは、朝食に来た生徒達が始業ギリギリまで見ていても終わ
るようなものではなく、昼休みに入る直前まで続いた。

終わるきつかけとなったのは、昼休みを告げる鐘。

お互い集中が途切れかけてきていたので、鐘の音に少し互いに気を取られ、それを勝機と見た互いが互いを己の得物で貫く。

互いに貫かれた肩は、身体を中心線から幅10メートルの中に無かった。

だけど、お互いの集中力から考えると此処が限界。

互いに中心を狙ったから。

ゆっくりと得物を引き抜き合い、二人で肩から血をダラダラ流しながらガツチリ握手。

服が朱く染まる事は気にせず救護室に向かい、待機していた医者に治してもらった。

治療後、何故か公爵夫人はお昼をあたしと一緒に食べた。

ルイズと食べないのか、と尋ねると、ルイズにはルイズの付き合い

というものがある、と澄まして答える。

あたしの付き合いは存在しないらしい。

遠くからルイズとキュルケがあたしに頑張つてと合図を送って来たのは腹が立った。

その後、二年生の『東方総合学』の授業参観を言い出した。

あたしはルイズへの嫌がらせになると思い軽く了承。

教室に招き入れると生徒達はかなり驚いた様子だった。

内容自体は昨日予告した通りの座学だったのだけど、生徒達、特にルイズの緊張は酷かった。

軽く昨日した事のおさらいをし、数人に何故こうなるのかの考えを聞く。

そして、『概念』について説明した。

鐘が鳴り、このままルイズの授業参観をするであろう公爵夫人に一旦失礼する旨を伝えようと近づくと、逆に『次は何処で授業なのですか?』と問い掛けられた。

一年生なんです、と反射的に答えると、『参りましょう』と引つ張

られていった。

此処も昨日の続きでメイジとマギの違いについて話をした。

使用する魔法について言及し、精霊は基本的に誰にでも力を貸すということを教えた。

そして呪文詠唱が出来ないタカミチの例を出し、魔法という形だけではなく魔力をそのまま使うという可能性を示した。

再び鐘が鳴ったので授業終了を告げ、今度は自ら公爵夫人を引っ張って三年生の教室に向かう。

今日もまた最前列の子が恐る恐るあたしに質問してきた。

「あの、ミス。

何故此処にヴァリエール公爵夫人がいらっしゃるのですか？」

まあ、普通そうだよな。

二年生にはルイズが居るし、一年生はまだ若いからかあたしの話に目を輝かせていただけたけど、普通そうよね。

だって公爵夫人だもの。

「まあ、色々あつて。

学院に來た理由は複雑すぎて説明出来ませんが、授業に連れてきた理由は後ほど明かします。

・・・他に質問は？

無ければ授業に入りますが」

生徒に問うと、再び彼が手を挙げた。

どうやら、彼は代表みたいだ。

「朝からお二人で戦闘していた理由とその勝敗は？

オールド・オスマンからは止めずに放置するよう言われましたけど気になるんです」

それもごもつとも。

何故か朝食に向かうと講師がかなり偉い公爵夫人と戦闘していて、責任問題になつてもおかしくないのに学院長は止める気は無く興味も薄そうな感じ。

気にならない方がおかしい。

二年生が聞いてこなかったのはルイズの反応からヤバさを肌で感じ取っただけだろう。

「理由に関しては一切明かせないです。

これも学院に來た理由と重なりますので。

しかし勝敗は明かしましょう。
・・・引き分けでした」

ザワツと生徒が沸き立つ。

周囲からは『さすがヴァリエール家』や『ミスも公爵夫人も俺達と同じ生き物じゃないだろう』などの不敬っぽい事も聞こえた。
全体的には、自分達が束になって負けた相手と引き分ける公爵夫人の強さに驚いたようだ。

このまま放っておくと盛り上がるだけなので声をかけた。

「もう質問はありませんね？
それでは授業を始めます。

まず、公爵夫人を連れてきた理由を話しましょう。
端的に言つと、強さを求めるこのクラスの皆さんに必要なお方だからです」

一回区切り、公爵夫人に目で名を出す事を伺うと、許可が出た。

あたしは言葉を続ける。

「良いですか、こちらの公爵夫人はあの伝説のマンティコラ隊隊長、『烈風カリン』なのです！」

最後、強調するように叫ぶと生徒は興奮し始めた。

一人があたしに質問を投げかける。

「本物ですか、ミス!?」

「当たり前でしょう。」

カリンの姿は噂で聞いていないのですか?」

「た、確かにピンクブロンド。」

しかもミスと今朝、格闘していた時に使っていたのは王軍人が用いるレイピア。

その上、門の近くにはマンティコラが朝から居た。

烈風カリンの特徴に当て嵌まってる・・・!」

「父母から伝説を聞いて育ちました!

貴女のような軍人になりたいと思っています!!」

「俺も俺も!!」

たちまち公爵夫人のまわりに生徒が集まる。

しかし、彼女は烈風カリン。

カリスマ性は半端なものではなかった。

「静まれ！！」

そして、整列せよ！！

・・・今はカナ殿の授業中だ。

それに私が参加しているのは貴様らを鍛え上げる為であろう。

・・・相違有るかね、カナ殿」

一瞬で黙らませ、目の前に整列させた。

素晴らしい統率能力。

神に愛されるとは『彼』の事を言うのだろう。

そして、それはあたしにも服従すべきだと本能が理性に訴えるほどだった。

「いいえ。全くもってその通りでございますわ、カリン様。

・・・彼らは力を求めています。

それは自分の命を守る為、そして自分の腕一つで立身出世する為。

そして、貴方は過去に史上最高峰の練度と呼ばれたトップエリート集団を引っ張っておられたお方。

貴方ならば凡人から精鋭になる道筋を彼らに示す事は比較的楽でしょう。

故に。

大変恐縮ではありますが、今日だけでも彼らに鍛練のコツや武器の有用性を教授していただけると助かります。

私からも言っておりますがやはり退いたとはいえ本職の、しかも伝説の方から言われたとなれば説得力が段違いです。

生徒達も成長し従軍した時、あの『烈風力リン』に少しでも指導を受けた事は大きな糧となっているでしょう」

そのまま約一時間、三年生は烈風力リンに吹き飛ばされまくった。

あたしはニコニコ見てただけ。

そんなんでも授業の終わりには『カリンやっぱすげえ』だけじゃなく、『あの伝説の烈風を連れて来るなんてすげえ』とか『烈風力リンと互角ってミスすげえ』とキラキラした目で見られた。

やはり、憧れが目の前に居ると興奮するせいか誰しも子供になり、判断力が下がってしまうようだ。

夕方の食堂前。

公爵夫人は泊まる気は無かったようだ。

夕食を食べたらすぐ屋敷に帰ると終業時に言っていたので、時間も

遅いから泊まっていっただろうかと返したんだけど、公爵夫人が昼間からマンティコラに乗っているのは色々マズいから結構だと断られた。

それもそうか、と納得し、せめてもの配慮とルイズへの嫌がらせをかねて『最後くらいルイズと食事しながら学校の様子を伺ったらどうですか？』と提案したら、こちらは喜んで乗ってくれた。

そのまま食堂前で待機して、現れたルイズを捕まえ公爵夫人に手渡す。

才人に関しては、『とりあえず喋るな』と小声で脅したあたしが首を掴んだ。

「是非、親子水入らずで夕食を楽しんで下さい。

お嬢さんが学院に居たら、長期休暇にしか会えないでしょう。

滅多に会えない分、普段言えない悩みとかを聞いてあげて下さい。

・・・あたしにはもう、そう出来る相手が居ませんから・・・」

駄目押しとばかりに伏し目がちに呟き、もう一度ルイズと二人きりで食事する事を進めるあたし。

ルイズはあたしを『あんた、私のこと嫌いなわけ！？』と言わんばかりに睨みつけてるけど、オーラが己の運命に絶望した感じだから笑顔でスルー。

公爵夫人はその言葉になにかしらの感銘を受けたらしく、あたしに向かって感謝を示した。

「・・・その通りですね。

ありがとう、カナ殿。

貴女なら良い武人になれるでしょう。

貴女さえ良ければ私の名で王宮に推薦したいくらいです。

・・・そうでした、カナ殿。

いつまでも貴女からの呼称が『公爵夫人』では堅苦しい。

私の事はカリーヌと呼びなさい。

私もカナと呼びますから」

その言葉に、あたしとルイズだけじゃなく、食堂の前だからたまたま通りがかった人も驚いた。

ヴァリエール公爵夫人が直々に、東方の没落貴族を名乗るメイジ崩れの少女にファーストネームで呼び合うよう指示する。

なまじ拒否れないだけ有り得ない好待遇。

あたしは応えねばならない。

「・・・判りました、カリーヌさん。
今後ともよろしく願います」

「ええ、こちらこそ。

・・・本音を言えば『さん』は要らないのですが、まあ今日の所は良いでしょう。

カナ、良ければ夏期休暇にルイズと一緒に家に遊びに来なさい。

喜んで迎えましょう」

あたしがお辞儀すると、周りなど居ないかのように振る舞い、そしてあたしにニツコリと笑いかけるカーリヌさん。

周囲はどよめきを隠せない。

彼女を見習って、あたしも周囲を気にせずニツコリ笑い返答した。

「なら、お言葉に甘えて。

ルイズの帰省に相乗りさせて貰います。

・・・では、カーリヌさん。

あたしは少し野暮用を済まさなきゃいけないので、今日はお別れです。

ルイズとの食事、楽しんでから帰って下さいね」

「ええ、ありがとう。

貴女も学生と講師の両立に励みなさいね」

そう言うと、カーリヌさんはルイズの腕を柔らかく掴み食堂へ入っ

ていった。

残ったのは、あたしへの複数の視線。

嫉妬やら奇異やら畏敬やら、混ざりすぎて吐きそうになったので、ぶつぶつ文句を呟く才人を連れて厨房へ向かう事にした。

「おう、カナ！

お前色々とやらかしてんなー！！

聞いた話じゃ、ここ三日で貴族と決闘して、サイトを不意打ちしたガキに制裁かけて、

終いにゃあ、あの烈風カリンと杖じゃなく剣を交えたらしいじゃねえか！

お前、よく無事だったな！？」

これが、厨房に入って一番最初にかけられた言葉だった。

声の主は、厨房の主でもあるマルトーさん。

どうやらあたしのその細かい苦勞を知らないらしい。

「はいー？」

無事な訳ないでしょー？

最初の決闘こそ無傷だけど、才人を襲った卑怯者達からは金属の棒を五本貰ったし、烈風との模擬戦では肩を刺されたつての。あたしが費用持ちだったら多分まだ治ってなかったですよ」

金持っていないからね、と溜め息を吐きつつ愚痴るように言うと、なんか微妙そうな顔をされた。

「そりゃあーなんというか・・・、なあ？

・・・ご愁傷様つてどこか。

しかし、伝説の烈風相手に引き分けたつてのはかなり誇っていいはずだろう？」

お金は有るけど貰った感じからしておおっぴらに使えないしなあとか考えながら、あたしはマルトーさんの言葉を否定する。

「確かに強かったけど、お互い魔法使っていないもん・・・。

もし、使えてたら経験差から軽く捻られてたと思うのよ。

・・・それよりもさ、才人褒めてあげて？

平民である才人があのグラモン家の息子を剣で圧倒したんだから」

するとマルトーさんは踏ん反り返りながら怒ったふりをする。

「馬鹿言うんじゃないねえ。」

それはとつくのときまに『よく頑張ったな』って褒めたさ。ちゃんと今朝はそれで盛り上がったんだぜ？

サイトに『我等の剣』って名も付けたんだぞ！

・・・まっ、そうは言ってもだ。

昼にはお前と公爵夫人の話で持ち切りだったけどな」

そう悪戯っぽく言い、最後は豪快に笑った。

軽くいたたまれない気持ちになりながら才人を見ると、何故かこいとも興奮していた。

「当たり前だろ、佳奈すげえんだからな！

さっきも周りが騒いでたしさ。

・・・でもさ、ルイズのお母さんが佳奈に呼び捨てで良いって言うただけでなんであんなに盛り上がるんだ？」

興奮してたくせに理由は判ってなかったらしい。

しかし、マルトーさんにはその異常さが理解が出来ていた。

「な、なんだと・・・？」

それ、本当か？」

マルトーさんは何故か言われた本人が此処に居るのに才人の肩をわし掴んだ。
そして、端から見るとカツアゲの現場のような雰囲気醸し出しながら聞く。

才人はその剣幕にビビり、ただ事実を吐き出す。

「あ、ああ……。そうだけど、な、何がおかしいんだよ？」

その言葉で、マルトーさんはその恐い雰囲気を一変し才人の肩をバシバシ叩いた。

「おっ前はバカだなあ！
良いか？」

王家の血筋を引く有力貴族であるヴァリエール家の奥方が他人に名前と呼ばせるなんて、普通は学生や軍人だった頃から仲の良い奴くらいにしか許さねえんだ。

それだってプライベートな所でしか無理だろうなあ。

なのに公爵夫人が他人が大勢居る中で名前で呼べなんつうのはな、『カナにはヴァリエール家が後盾になる』って言っているようなもんだぞ！

しかも、三年生には今まで貴族の中では公然の秘密だった『ヴァリエール公爵夫人』烈風カリン』を認めてしまった。

だから、カナにはヴァリエールの家紋だけじゃなくて烈風カリンの名前も後ろに付く事になる。

・・・おい、カナ。

このまま上手く行けば、もしかしたら養女にされる可能性も有るんじゃないのか？」

それはなかなか凄いだろ、とマルトーさんはあたしに振って来る。

しかし、あたしからすれば厄介以外の何物でも無い。

「それは勘弁。

今でさえヴァリエールの家紋が後ろに出来たって事は、馬鹿な事が出来ないって事だよ。

なのに、嫉妬や奇異の視線に曝される。

・・・その上、もし養女なんかになったらルイズが姉ですよ？

トリステインの貴族の在り方も叩き込まれるよ？

あたしにはとても出来ないよ」

ついでにあたしなんかを引き込んだらヴァリエール家への突く穴になるだけだからね、と軽く笑うと、マルトーさんはそうだよなと笑い返し。

才人は難しそうな顔を始めた。

マルトーさんと三人で、賄いを食べ始める。

やはり美味しい。

話は変わるけど、オスマンに感謝する時がある。

それは、お酒を飲むとき。

理由はアルコールが入って来て、回る感触がわかるから。

今までのあたしの中のワインは、単なる酸味のキツい独特なモノでしかなかった。

嫌いじゃないけど好きでもない、なければ飲むモノ。

なのに今は甘いお酒には負けるけどコレが旨い。

アルコールとはすわ恐ろしいものだ。

そして、今。

才人もマルトーさんも一緒に呑んでいる。

少し幸せ。

そんな些細なモノを味わっていると、才人が口を開いた。

「そういえばあの気障で女好きなギーシュがさ、佳奈の事こう言っ

てたな。

『僕はカナが恐ろしいよ。』

ああ、勿論顔が整っていないとかじゃない。

むしろ僕としては彼女の顔は幼い雰囲気ながらもかなり可愛いと思
っている。

だがね、あの槍を投げた時なんか血を流しているのに笑みを浮かべ
ていて、頬に飛んだ血が、なんというか、そう、凄艶だったんだ。
あのとてもない色気には逆に鳥肌が立ったね。』って

才人は無駄に上手いギーシュのモノマネをしながら、詳しく説明し
てくれた。

確かになんかギーシュが言いそうな感じ。

しかし、その評価されている相手があたしなのは反応に困る。

そもそも、この凹凸の少ない、ウェストがくびれてるとしか褒めづ
らい体型であるあたしへの評価文の中に、『凄艶』やら『色気』な
どが入る事が間違い。

どうせ、ギーシュがあの子の雰囲気飲まれただけだろう。

そうアルコールで回転が鈍い頭でそう判断してあたしが笑い飛ばそ
うとする前に、マルトーさんが吹いた。

「・・・ぶふおっ、はっはっはっはっはっはっはっはっはっはっ！！！！
いやー、そのギーシュつつ貴族の坊ちゃん面白いな！」

このカナが凄艶たあゝ、なかなか見る目が有るかもな。なんだかんだサイトのご主人様よりは女らしい形になつてゐるがよ、カナに色気なんかは持ち合わせてゐる訳がねえ！！

「まだあの太っちょの貴族様の方が胸はあるんじゃないか？」

ブチン。

「……普段のあたしは、この程度の冗談を流せるくらいには大人だった。」

だけど、個人的に最後の言葉を「本当にサイズバいかも……」
的な笑えない調子で言ったのは許せない。

しかもアルコールが入っている。

さらに、その後の才人のマルトーへの言葉が歯止めを壊した。

「なに言ってるんすか……ふふ。」

確かに胸囲は軽く負けてると思うけど・・・ふっ、ウ、ウエストは・・・ウエストは細いし、まあ、小さくてもルイズより、ふふふっ、有るんだ、から、まだマシじゃないっすか・・・ふふっ」

・・・あたしは、貧乳ではない。

カテゴリー的には普乳か美乳なのだ。

巨乳とされるシエスタやキュルケがワンランク上の爆乳なのだ。

そして、制服の構造上あたしみたいなタイプは着痩せする。

だから、扱いとしてルイズやタバサやモンモランシーと同じ扱いを受けているだけ。

そんな、色々な嫉妬や希望や言い訳やコンプレックスが入り混じっていく。

二人は酒が入ってなければすぐ気付けただろうに、いきなり黙ったあたしを不思議がり笑いを堪えながら覗き込んできた。

瞬間、あたしは耐え切れなくなり顔を上げてキレた。

「あ、あたし、決して大きくはないけど貧乳じゃないもんっ！！！！
『ちっぱい』なんかじゃないんだもんっ！！

そりゃあルイズとかタバサは確かにまっ平らですよ！！？

それはもう穏やかな海ですよ！！

でも、あたしやモンモランシーはちゃんと起伏してんの！！！！
膨らんでんの！！！！

触ったら見た目以上にボリリューム有るの！！！！！！

あんたら男に愉しんで貰える程度には存在してんの！！！！

あたしなんてアジア系にも関わらず！！！！！！

なんなら触るか！！！！？

ほら、直に触って確かめてみなさいよ！！！！！！」

そして、酔っているとは思えないスピードでワイシャツの全てのボタンを開けた。

あたし、ヒートアップ。

かなり恥ずかしいが、この時は自分を完全に見失っていた。

さっきまで笑っていた二人はまさかキレて脱ぐとは思っていなかったらしく、かなり慌て始めた。

だけど、あたしには見えてない。

「ほらあつ、触ってみてよお！！

シエスタみたいに掴めるものではないけどさあ！！！！

だけど手に柔らかさは感じるはずだからあ！！！！！！

ほら、ほらつ、ほらあつ！！！！」

マルトーと才人、あたしに引いて酔いが醒める。

だから、『いやあ、そのつ．．．』とか『いやあ、ちよつと．．．』とかの实の無い返事ばかりしか言えない。

しかし、暴走したあたしには関係ないし理解できない。

感情が爆発して泣き出してしまった。

「ううつ、ぐすつ．．．。

ずずつ。な、なにさあ．．．。

あんたらからしたらあ、あたしのつまらない胸は揉むどころかあ見る価値もないってわけえ．．．？

そ、それとも、なにい．．．？

太っちょマリコルヌのを揉んでた方が嬉しいわけえ．．．？」

ぐずりながら二人を詰ると、マルトーさんは才人を裏切りフォロ―に入ってきた。

「馬鹿言うんじゃない。

お前の魅力はスタイルなんかじゃない。

お前は十分いい女だからな。

顔も可愛らしいし、俺がもつと若かったらほつとかねえよ」

「ほ、ほんと・・・？」

あたしが上目遣いで聞くと、マルトーさんは目を逸らして軽く紅くなりながら肯定してくれる。

「あ、ああ。当たり前だ。

だから、な？

とりあえず、その・・・だ、前を止めとけ。

そんで、制裁するならあの巨乳主義者のサイトを断罪しろ。

あいつは俺と違って巨乳ならなんでも良いおっぱい聖人だ。

その太つちよマリコルヌとやらのでも喜んで揉む裏切り者なんだ」

そして才人を贄にした。

才人が『さ、最低だなっ！マルトーめ！！』とか叫んでたけど酔ってるあたしには些細な事。

あたしは断罪しなきゃいけない。

「・・・才人。

あんたは女の子そのものじゃなくて胸ならなんでも良いんだ？

あんたにとつては、巨乳以上の胸以外はルイズのもあたしのも差が無いわけね？」

一応、最終確認をする。

あたしとしては、此処で心を打つ言葉で命乞いしたら断罪は避けてやるつもりだった。

しかし、奴はいくら酔いが醒めたとえどもアルコールにやられている。

そのせいで救いの蜘蛛の糸を見逃し、自身の最期と逆に開き直っていた。

才人は急に凛々しくなり、あたしの目を見る。

そして、少しドキッとしたこちらに語りかけるように声を出した。

「いいや、違う。

ルイズのと佳奈のは違う。

俺は、俺は巨乳も好きだけど無乳も好きなんだっ！！

ルイズの胸は無乳だから愛せるけど、お前のは貧乳だから愛せないんだよっ！！！！」

・・・今まで聞いた中で一番最低な台詞だった。

マルトーさんもそう来るとは思わなかったらしく頭を抱えている。

才人は、無駄にやり遂げた感いっぱい表情で座っている。

あたしは顔に素晴らしい絵画のような微笑みを張り付け、我慢せずに思うがまま才人のモノに思い切り蹴りを入れた。

うずくまりながら、笑顔で崩れ落ちる才人。

あたしはそれにワインを一瓶撒いてから、部屋に向けて駆けて行った。

厨房から出るときにとてつもなく心をえぐる捨て台詞を吐いて。

「はんっ！

短小のくせに人の胸指して貧乳貧乳言いやがって！！

どうせあんたのアレの大きさだつてさ、ここの平均の三分の一もないくせに図に乗ってんじゃないわよ！！！！

言っとくけどね、小さすぎて蹴った感触無かったんだから！！！！」

ワイン瓶片手に、あたしはそのまま部屋に飛び込むとベソをかきながらベッドでふて寝。

珍しくかなり早めの就寝となってしまった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8684m/>

□ 《外伝》 □ 不死の“概念”剣製と真祖の少女

2010年12月27日01時09分発行